

第15回「保育所保育指針」改定に関する検討会

- 1 日時 平成19年12月21日（金）15：00～17：30
- 2 場所 厚生労働省5階 共用第7会議室
- 3 議題
 - 保育所保育指針の改定（報告書）について
 - 保育指針解説書の作成について
 - 今後の予定について
- 4 配付資料
 - 資料1 保育所保育指針の改定について（報告書）
 - 資料2 保育所保育指針（案）
 - 資料3 保育所保育指針改正案対照表
 - 資料4 中間報告後の修正の主なポイント
 - 資料5 中間報告以降の審議経過と今後の改定スケジュール
 - 資料6 保育所保育指針解説書の構成（案）
 - 資料7 保育所保育指針の改定について（概要）

保育所保育指針の改定について（報告書）

平成19年12月21日

「保育所保育指針」改定に関する検討会

本検討会においては、昨年12月から、保育所における保育の内容を定める「保育所保育指針」の改定について検討を行い、本年8月に中間報告を取りまとめた。その後、保育関係団体からの意見聴取を行うなど関係者の意見を聞きながら、更に内容の充実が必要な点等について検討を進めてきた。

このたび、これまでの議論を踏まえ、以下のとおり最終的な取りまとめを行い、「保育所保育指針（案）」を公表することとした。本検討会における検討結果が、告示化される「保育所保育指針」に反映され、保育現場において十分に活用されることを期待する。

1. 改定の背景

○ 現行の「保育所保育指針」策定から7年余りが経過し、この間、子どもたちが家庭内や地域において人と関わる経験が少なくなったり、生活リズムが乱れたりするなど、子どもの生活環境が変化してきている。また、保護者についても、子育ての孤立化や子どもに関する理解の不足などから、不安や悩みを抱える保護者が増加し、養育力の低下が指摘されたりするなど、子育ての環境が変化してきている。このように、子どもの育ちをめぐる環境が大きく変化する中で、以下のように、保育所に期待される役割が深化・拡大している。

(1) 乳幼児期は、子どもが生涯にわたる人間形成の基礎を培う極めて重要な時期であり、家庭や地域の子育て力の低下が指摘される中で、保育所における質の高い養護や教育の機能が求められている。特に、昨年12月に制定された教育基本法に幼児期の教育の振興が盛り込まれるなど、就学前の子どもに対する教育機能の充実が課題となっている。

(2) 保育所に入所している子どもの保育とともに、その保護者に対し、就労状況や子どもとの関係等を踏まえた適切な支援、更には地域の子どもやその保護者に対する子育て支援を担う役割が一層高まっている。

○ このような背景を踏まえ、保育所が果たすべき役割を再確認し、子どもの保育や保護者への支援等を通じて適切にその役割や機能を発揮できるよう、保育所の根幹である保育の内容の質を高める観点から、「保育所保育指針」の内容の改善・充実を図ることが必要である。

2. 改定に当たっての基本的考え方

(1) 各保育所の保育の内容の質を高める観点から、「保育所保育指針」を厚生労働大臣が定める告示とすることにより、保育所における保育の内容及びこれに関連する運営に

関する事項を定めた最低基準としての性格を明確化する。

- (2) 告示化により、すべての保育所が遵守すべき最低基準として位置付けられるが、保育の質を向上させるための各保育所の創意工夫や取組を促す観点から、内容の大綱化を図る。
- (3) 「保育所保育指針」が保育現場における実践に日常的に活用されるとともに、子どもの保護者にも理解される内容となるよう、明解で分かりやすい表現を用いる。
- (4) 「保育所保育指針」と併せて解説を作成し、内容の解説や補足説明、保育を行う上での留意点、各保育所における取組の参考になる関連事項等を記載する。

3. 改定の内容

- 改定の背景や改定に当たっての基本的考え方を踏まえ、現行の「保育所保育指針」については、次に掲げる内容の見直しが必要である。別添の「保育所保育指針（案）」は、以下の内容を踏まえて作成したものである。

なお、2.（4）に述べた「保育所保育指針」の解説については、本年8月に本検討会の下に設けられたワーキンググループにおいて審議を行っているところであり、本年度末を目途に取りまとめを行うこととしたい。

（保育所の役割）

- ・ 保育所は、入所する子どもの健全な心身の発達を図ることを目的とする児童福祉施設であり、子どもの最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進することに最もふさわしい生活の場でなければならない。こうした保育所の役割について、「保育所保育指針」に明確に位置付けることが必要である。その際、保育所は、その特性を生かし、家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら、入所する子どもの保護者に対する支援、地域における子育て支援など保護者に対する支援等を行う役割を担っていることを明確化すべきである。
- ・ 保育所の役割及び機能が適切に発揮されるよう、子どもの保育や保護者の支援に当たる保育士の業務を明確化するとともに、保育士をはじめとする職員間の連携や地域との連携についても明示することが必要である。
- ・ 保育の内容に関する対外的な説明責任、個人情報への適切な取扱いや保護者の苦情の解決など、保育所の社会的責任を明確化すべきである。

(保育の内容、養護と教育の充実)

- ・保育所における保育は、養護と教育が一体となって、豊かな人間性を持った子どもを育成することをその特性としている。このことについて、保育に携わる者の間に共通の理解を形成し、養護と教育の充実を図るため、養護とは、子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わりであり、教育とは、子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助であるということを確認すべきである。
- ・上記に関連して、保育の「ねらい」と「内容」についても、具体的な内容を把握するための視点として、養護と教育の両面から示すことが有効であると考えられる。この場合、実際の保育においては、子どもの活動との関わりの中で、養護と教育が一体となって展開されることに留意することが必要である。
- ・「保育の内容」については、現行の「保育所保育指針」においては6か月未満児から6歳児までの八つの発達過程区分ごとに示されているが、内容の大綱化を図る観点から、どの発達過程区分にも共通する基本的な事項を示した上で、乳児、3歳未満児、3歳以上児など発達過程に応じた特有の配慮事項を併せて示すべきである。
- ・他方で、一人一人の子どもの状況や発達過程を踏まえた適切な保育を行うに当たっては、乳幼児期の発達の特性やその過程について、誕生から就学までの長期的視野を持って子どもを理解することが必要であることから、「保育の内容」を支えるものとして、子どもの発達の道筋を示すことが必要である。
- ・子どもの健康・安全及び食育については、子どもの生命を保持し、健全な心身の発達を図る上で欠くことができない重要なものであり、「保育所保育指針」に明確に位置付けるべきである。
- ・これらの健康・安全及び食育に関する内容については、各保育所が作成する保育の計画の中に適切に位置けるとともに、施設長の責任の下に、全職員が適切に分担、協力して、健康・安全及び食育に配慮した保育が年間を通じて計画的に展開されることが期待される。また、取組の方針や具体的な活動の企画立案等の業務については、専門的職員が担当することが望ましい。

(小学校との連携)

- ・子どもの生活や発達の連続性を踏まえ、保育の内容の工夫を図るとともに、就学に向けて、小学校との積極的な連携を図るよう配慮することが求められる。

- ・また、保育所においても、幼稚園と同様に、就学に際して、市町村の支援の下に、子どもの育ちを支えるための資料が保育所から小学校へ送付され、活用されるようにすることが必要である。

(保護者に対する支援)

- ・保育所の目的は、入所する子どもの健全な心身の発達を図ることであるが、今日、保育所は、保育所の特性や保育士の専門性を生かし、家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら、保育所に入所する子どもの保護者や地域の子育て家庭を積極的に支援するという役割を果たしていくべきである。
- ・保護者に対する支援を行うに当たっては、子どもの最善の利益を考慮するとともに、保護者とともに子どもを育てる営みに関わるという視点が重要である。また、保護者一人一人の自己決定を尊重することや、保護者の養育力の向上に結び付くような支援が行われることが求められる。

(計画・評価、職員の資質向上)

- ・保育現場における保育実践及び「保育計画」をめぐっては、
 - ① 保育所においては、保育士等の技量や持ち味により保育が行われてきた傾向があり、保育士等が保育所の保育方針や目標について共通認識を持ち、それに基づき計画的に保育を行うといった取組や、「保育計画」及び「指導計画」の展開において、保育実践を振り返り、保育を評価し見直すという一連の保育の改善のための組織的な取組などが弱い。
 - ② 「保育計画」については、「保育の計画」や市町村等が定める保育計画との混同が見られるとともに、保健計画や食育の計画など各保育所が作成する様々な計画がある中で、その位置付けが曖昧になっている。といった課題が見られる。

このため、「保育計画」について、その名称を「保育課程」に改め、保育所の保育の基本的な計画として、他の計画よりも上位にあることを明確にすることが必要である。これにより、保育実践の組織性及び計画性がより一層高まり、保育の質の向上に資するものと考えられる。
- ・上記の「保育課程」については、子どもの育ちに関する長期的見通しを持って、子どもの生活の連続性や発達の連続性に留意して編成されることが必要である。
- ・このような「保育課程」とこれに基づく「指導計画」の展開において、保育士等が保育実践を振り返り、自己評価することを通して、保育士等の資質向上が図られることが望まれる。また、保育所においては、保育の質の向上を図り、保育所の役割

や社会的責任を果たすため、「保育課程」及び「指導計画」の展開や保育士等の自己評価を踏まえ、その保育の内容等について、保護者や地域住民等の意見も聞くなどして、自ら評価を行い、その結果を公表するよう努めることが必要である。

- ・各保育所においては、上記の自己評価等を踏まえ、職員が保育所の課題について共通理解を深め、体系的・計画的な研修や職員の自己研鑽等を通じて、職員の資質向上及び職員全体の専門性の向上を図ることが求められる。
- ・また、保育の質及び職員の資質を向上させるため、施設長の責務を明確化することが必要である。

4. 改定に伴う今後の検討課題

(1) 「保育所保育指針」の趣旨・内容の保育現場等への伝達及び普及

- 改定後の「保育所保育指針」の趣旨・内容が保育の関係者に十分理解され、同指針が保育現場における実践に日常的に活用されるよう、「保育所保育指針」が施行されるまでの間に、保育所の職員を対象とした研修の充実や市町村等の担当者に対する十分な周知等が必要である。また、「保育所保育指針」が子育て中の保護者にも理解されるものとなるよう、保育現場のみならず、広く社会への伝達及び普及を図ることが必要である。
- また、指定保育士養成施設においても、関係団体等の支援の下に、「保育所保育指針」の改定を踏まえた講義・演習内容等の見直しや、保育現場との一層の連携・協力が図られることが求められる。

(2) 保育内容の充実に資するための制度改正

- 保育所の保育の内容を規定する児童福祉施設最低基準（昭和23年厚生省令第63号）第35条において、健康状態の観察などの保育士等が行わなければならない事項や、自由遊びなどの子どもの活動といった個別の事項を列記するのではなく、養護及び教育を一体的に行うという保育所における保育の特性を明記することが必要である。

(3) 保育所における人材の確保と定着

- 保育士等がやりがいを感じながら、将来にわたって働き続けられるようにすることにより、保育所における質の高い人材を安定的に確保し、その定着を促進してい

くことが必要である。また、保育現場に求められる課題に対応するため、保育所職員の資質や専門性を向上させていくことも重要である。このため、保育士の資格や養成、研修の在り方について見直しを行うことが必要である。

- 職員の資質を向上する観点から施設長の責任と役割が高まっていることを踏まえ、施設長の資格の在り方についても検討することが必要である。

(4) 保育環境等の整備

- 「保育所保育指針」の内容が保育現場で確実に実践されるよう、保育所における取組はもとより、国及び地方公共団体においても、保育内容の充実、保健や安全の確保及び食育の推進等の観点から、必要な財源の確保や業務の効率化の推進と併せ、保育環境の改善・充実のための方策について検討することが必要である。
- また、保育所の職員の資質向上等の観点から、研修の内容や実施方法の改善、職員の研修への積極的参加、保育所外の人材の積極的活用が図られることが必要である。

(5) 保育の質の向上のためのプログラムの策定

- 国及び地方公共団体においては、新たな「保育所保育指針」を踏まえ、保育実践の改善・向上、幼稚園、小学校など地域の関係機関との連携、子どもの健康・安全の確保、保護者に対する支援、職員の資質向上、これらを支える様々な環境整備など、今後取り組んでいくことが必要な施策を一体的・計画的に推進するためのプログラムを策定し、各保育所における保育の質の向上に確実につなげていく取組が必要である。

(別添)

資料 2

保育所保育指針（素案）

保育所保育指針素案目次

第1章 総則	1
1. 趣旨	
2. 保育所の役割	
3. 保育の原理	
(1) 保育の目標	
(2) 保育の方法	
(3) 保育の環境	
4. 保育所の社会的責任	
第2章 子どもの発達	4
1. 乳幼児期の発達の特性	
2. 発達過程	
(1) おおむね6か月未満	
(2) おおむね6か月から1歳3か月未満	
(3) おおむね1歳3か月から2歳未満	
(4) おおむね2歳	
(5) おおむね3歳	
(6) おおむね4歳	
(7) おおむね5歳	
(8) おおむね6歳	
第3章 保育の内容	7
1. 保育のねらい及び内容	
(1) 養護に関わるねらい及び内容	
ア 生命の保持	
イ 情緒の安定	
(2) 教育に関わるねらい及び内容	
ア 健康	
イ 人間関係	
ウ 環境	
エ 言葉	
オ 表現	
2. 保育の実施上の配慮事項	
(1) 保育に関わる全般的な配慮事項	
(2) 乳児保育に関わる配慮事項	
(3) 3歳未満児の保育に関わる配慮事項	
(4) 3歳以上児の保育に関わる配慮事項	

第4章 保育の計画及び評価	14
1. 保育の計画	
(1) 保育課程	
(2) 指導計画	
ア 指導計画の作成	
イ 指導計画の展開	
(3) 指導計画の作成上、特に留意すべき事項	
ア 発達過程に応じた保育	
イ 長時間にわたる保育	
ウ 障害のある子どもの保育	
エ 小学校との連携	
オ 家庭及び地域社会との連携	
2. 保育の内容等の自己評価	
(1) 保育士等の自己評価	
(2) 保育所の自己評価	
第5章 健康及び安全	17
1. 子どもの健康支援	
(1) 子どもの健康状態並びに発育及び発達状態の把握	
(2) 健康増進	
(3) 疾病等への対応	
2. 環境及び衛生管理並びに安全管理	
(1) 環境及び衛生管理	
(2) 事故防止及び安全対策	
3. 食育の推進	
4. 健康及び安全の実施体制等	
第6章 保護者に対する支援	20
1. 保育所における保護者に対する支援の基本	
2. 保育所に入所している子どもの保護者に対する支援	
3. 地域における子育て支援	
第7章 職員の資質向上	22
1. 職員の資質向上に関する基本的事項	
2. 施設長の責務	
3. 職員の研修等	

保育所保育指針（案）

第1章 総則

1 趣旨

- (1) この指針は、児童福祉施設最低基準（昭和23年厚生省令第63号）第35条に基づき、保育所における保育の内容に関する事項及びこれに関連する運営に関する事項を定めるものである。
- (2) 各保育所は、この指針において規定される保育の内容に係る基本原則に関する事項等を踏まえ、各保育所の実情に応じて創意工夫を図り、保育所の機能及び質の向上に努めなければならない。

2 保育所の役割

- (1) 保育所は、児童福祉法（昭和22年法律第164号）第39条に基づき、保育に欠ける乳幼児の保育を行い、その健全な心身の発達を図ることを目的とする児童福祉施設であり、入所する子どもの最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進することに最もふさわしい生活の場でなければならない。
- (2) 保育所は、その目的を達成するために、保育に関する専門性を有する職員が、家庭との緊密な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている。
- (3) 保育所は、入所する子どもを保育するとともに、家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら、入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭に対する支援等を行う役割を担うものである。
- (4) 保育所における保育士は、児童福祉法第18条の4を踏まえ、保育所の役割及び機能が適切に発揮されるように、倫理観に裏付けられた専門的知識、技術及び判断をもって、子どもを保育するとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものである。

3 保育の原理

(1) 保育の目標

- ア 保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である。このため、保育所の保育は、子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために、次の目標を目指して行わなければならない。
 - (ア) 十分に養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満ちし、生命の保持及び情緒の安定を図ること。

- (イ) 健康、安全など生活に必要な基本的な習慣や態度を養い、心身の健康の基礎を培うこと。
 - (ウ) 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にすることを育てるとともに、自主、自立及び協調の態度を養い、道徳性の芽生えを培うこと。
 - (エ) 生命、自然及び社会の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うこと。
 - (オ) 生活の中で、言葉への興味や関心を育て、話したり、聞いたり、相手の話を理解しようとするなど、言葉の豊かさを養うこと。
 - (カ) 様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと。
- イ 保育所は、入所する子どもの保護者に対し、その意向を受け止め、子どもと保護者の安定した関係に配慮し、保育所の特性や保育士等の専門性をいかして、その援助に当たらなければならない。

(2) 保育の方法

保育の目標を達成するために、保育士等は、次の事項に留意して保育しなければならない。

- ア 一人一人の子どもの状況や家庭及び地域社会での生活の実態を把握するとともに、子どもが安心感と信頼感を持って活動できるよう、子どもの主体としての思いや願いを受け止めること。
- イ 子どもの生活リズムを大切に、健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境や、自己を十分に発揮できる環境を整えること。
- ウ 子どもの発達について理解し、一人一人の発達過程に応じて保育すること。その際、子どもの個人差に十分配慮すること。
- エ 子ども相互の関係づくりや互いに尊重する心を大切に、集団における活動を効果あるものにするよう援助すること。
- オ 子どもが自発的、意欲的に関わられるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。特に、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること。
- カ 一人一人の保護者の状況やその意向を理解、受容し、それぞれの親子関係や家庭生活等に配慮しながら、様々な機会をとらえ、適切に援助すること。

(3) 保育の環境

保育の環境には、保育士や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、更には自然や社会の事象などがある。保育所は、こうした人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものとなるよう、次の事項に留意しつつ、計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない。

- ア 子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくことができるよう配慮すること。
- イ 子どもの活動が豊かに展開されるよう、保育所の設備や環境を整え、保育所の保健的環境や安全の確保などに努めること。

ウ 保育室は、温かな親しみとくつろぎの場となるとともに、生き生きと活動できる場となるように配慮すること。

エ 子どもが人と関わる力を育てていくため、子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整えること。

4 保育所の社会的責任

(1) 保育所は、子どもの人権に十分配慮するとともに、子ども一人一人の人格を尊重して保育を行わなければならない。

(2) 保育所は、地域社会との交流や連携を図り、保護者や地域社会に、当該保育所が行う保育の内容を適切に説明するよう努めなければならない。

(3) 保育所は、入所する子ども等の個人情報を適切に取り扱うとともに、保護者の苦情などに対し、その解決を図るよう努めなければならない。

第2章 子どもの発達

子どもは、様々な環境との相互作用により発達していく。すなわち、子どもの発達は、子どもがそれまでの体験を基にして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身に付け、新たな能力を獲得していく過程である。特に大切なのは、人との関わりであり、愛情豊かで思慮深い大人による保護や世話などを通して、大人と子どもの相互の関わりが十分に行われることが重要である。この関係を起点として、次第に他の子どもとの間でも相互に働きかけ、関わりを深め、人への信頼感と自己の主体性を形成していくのである。

これらのことを踏まえ、保育士等は、次に示す子どもの発達の特性や発達過程を理解し、発達及び生活の連続性に配慮して保育しなければならない。その際、保育士等は、子どもと生活や遊びを共にする中で、一人一人の子どもの心身の状態を把握しながら、その発達の援助を行うことが必要である。

1 乳幼児期の発達の特性

- (1) 子どもは、大人によって生命を守られ、愛され、信頼されることにより、情緒が安定するとともに、人への信頼感が育つ。そして、身近な環境（人、自然、事物、出来事など）に興味や関心を持ち、自発的に働きかけるなど、次第に自我が芽生える。
- (2) 子どもは、子どもを取り巻く環境に主体的に関わることにより、心身の発達が促される。
- (3) 子どもは、大人との信頼関係を基にして、子ども同士の関係を持つようになる。この相互の関わりを通じて、身体的な発達及び知的な発達とともに、情緒的、社会的及び道徳的な発達が促される。
- (4) 乳幼児期は、生理的、身体的な諸条件や生育環境の違いにより、一人一人の心身の発達の個人差が大きい。
- (5) 子どもは、遊びを通して、仲間との関係を育み、その中で個の成長も促される。
- (6) 乳幼児期は、生涯にわたる生きる力の基礎が培われる時期であり、特に身体感覚を伴う多様な経験が積み重なることにより、豊かな感性とともに好奇心、探究心や思考力が養われる。また、それらがその後の生活や学びの基礎になる。

2 発達過程

子どもの発達過程は、おおむね次に示す8つの区分としてとらえられる。ただし、この区分は、同年齢の子どもの均一的な発達の基準ではなく、一人一人の子どもの発達過程としてとらえるべきものである。また、様々な条件により、子どもに発達上の課題や保育所の生活になじみにくいなどの状態が見られても、保育士等は、子ども自身の力を

十分に認め、一人一人の発達過程や心身の状態に応じた適切な援助及び環境構成を行うことが重要である。

(1) おおむね6か月未満

誕生後、母体内から外界への急激な環境の変化に適応し、体重や身長が増加するなど、著しい発達が見られる。首がすわり、手足の動きが活発になり、その後、寝返り、腹ばいなど全身の動きが活発になる。視覚、聴覚などの感覚の発達はめざましく、泣く、笑うなどの表情の変化や体の動き、なん語などで自分の欲求を表現し、これに応答的に関わる特定の大人との間に情緒的な絆が形成される。

(2) おおむね6か月から1歳3か月未満

座る、はう、立つ、つたい歩きといった運動機能が発達すること、及び腕や手先を意図的に動かせるようになることにより、周囲の人や物に興味を示し、探索活動が活発になる。特定の大人との応答的な関わりにより、情緒的な絆が深まり、あやしてもらいと喜ぶなどやり取りが盛んになる一方で、人見知りをするようになる。また、身近な大人との関係の中で、自分の意思や欲求を身振りなどで伝えようとし、大人から自分に向けられた気持ちや簡単な言葉がわかるようになる。食事は、離乳食から幼児食へ徐々に移行する。

(3) おおむね1歳3か月から2歳未満

歩き始め、手を使い、言葉を話すようになることにより、身近な人や身の回りの物に自発的に働きかけていく。歩く、押す、つまむ、めくるなど様々な運動機能の発達や新しい行動の獲得により、環境に働きかける意欲を一層高める。その中で、物を取り取りしたり、取り合ったりする姿が見られるとともに、玩具等を実物に見立てるなどの象徴機能が発達し、人や物との関わりが強まる。また、大人の言うことが分かるようになり、自分の意思を親しい大人に伝えたいという欲求が高まる。指差し、身振り、片言などを盛んに使うようになり、二語文を話し始める。

(4) おおむね2歳

歩く、走る、跳ぶなどの基本的な運動機能や、指先の機能が発達する。それに伴い、食事、衣類の着脱など身の回りのことを自分でしようとする。また、排泄の自立のための身体的機能も整ってくる。発声が明瞭になり、語いも著しく増加し、自分の意思や欲求を言葉で表出できるようになる。行動範囲が広がり探索活動が盛んになる中、自我の育ちの表れとして、強く自己主張する姿が見られる。盛んに模倣し、物事間の共通性を見いだすことができるようになるとともに、象徴機能の発達により、大人と一緒に簡単なごっこ遊びを楽しむようになる。

(5) おおむね3歳

基本的な運動機能が伸び、それに伴い、食事、排泄、衣類の着脱などもほぼ自立できるようになる。話し言葉の基礎ができて、盛んに質問するなど知的興味や関心が高

まる。自我がよりはっきりしてくるとともに、友達との関わりが多くなるが、実際には、同じ場所で同じような遊びをそれぞれが楽しんでいる平行遊びであることが多い。大人の行動や日常生活において経験したことをごっこ遊びに取り入れたり、象徴機能や観察力を発揮して、遊びの内容に発展性が見られるようになる。予想や意図、期待を持って行動できるようになる。

(6) おおむね4歳

全身のバランスを取る能力が発達し、体の動きが巧みになる。自然など身近な環境に積極的に関わり、様々な物の特性を知り、それらとの関わり方や遊び方を体得していく。想像力が豊かになり、目的を持って行動し、作ったり、描いたり、試したりするようになるが、自分の行動やその結果を予測して不安になるなどの葛藤も経験する。仲間とのつながりが強くなる中で、けんかも増えてくる。その一方で、決まりの大切さに気付き、守ろうとするようになる。感情が豊かになり、身近な人の気持ちを察し、少しずつ自分の気持ちを抑えられたり、我慢ができるようになってくる。

(7) おおむね5歳

基本的な生活習慣が身に付き、運動機能はますます伸び、喜んで運動遊びをしたり、仲間とともに活発に遊ぶ。言葉により共通のイメージを持って遊んだり、目的に向かって集団で行動することが増える。さらに、遊びを発展させ、楽しむために、自分たちで決まりをつくったりする。また、自分なりに考えて判断したり、批判する力が生まれ、けんかを自分たちで解決しようとするなど、お互いに相手を許したり、異なる思いや考えを認めたりといった社会生活に必要な基本的な力を身に付けていく。他人の役に立つことを嬉しく感じたりして、仲間の中の一人としての自覚が生まれる。

(8) おおむね6歳

全身運動が滑らかで巧みになり、快活に跳び回るようになる。これまでの体験から、自信や、予想や見通しを立てる力が育ち、心身ともに力があふれ、意欲が旺盛になる。仲間の意思を大切にしようとし、役割の分担が生まれるような共同遊びやごっこ遊びを行い、満足するまで取り組もうとする。様々な知識や経験をいかし、創意工夫を重ね、遊びを発展させる。思考力や認識力も高まり、自然事象や社会事象、文字などへの興味や関心も深まっていく。身近な大人に甘え、気持ちを休めることもあるが、様々な経験を通して自立心が一層高まっていく。

第3章 保育の内容

保育の内容は、「ねらい」及び「内容」で構成される。「ねらい」は、第1章（総則）に示された保育の目標をより具体化したものであり、子どもが保育所において、安定した生活を送り、充実した活動ができるように、保育士等が行わなければならない事項及び子どもが身に付けることが望まれる心情、意欲、態度などの事項を示したものである。また、「内容」は、これらの「ねらい」を達成するために、子どもの生活やその状況に応じて保育士等が適切に行う事項と、保育士等が援助して子どもが環境に関わって経験する事項を示したものである。

保育士等が、上記の「ねらい」及び「内容」を具体的に把握するための視点として、「養護に関わるねらい及び内容」と「教育に関わるねらい及び内容」との両面から示しているが、実際の保育においては、養護と教育が一体となって展開されることに留意することが必要である。

ここにいう「養護」とは、子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わりである。また、「教育」とは、子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助であり、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」及び「表現」の5領域から構成される。この5領域並びに「生命の保持」及び「情緒の安定」に関わる保育の内容は、子どもの生活や遊びを通して相互に関連を持ちながら、総合的に展開されるものである。

1 保育のねらい及び内容

(1) 養護に関わるねらい及び内容

ア 生命の保持

(ア) ねらい

- ① 一人一人の子どもが、快適に生活できるようにする。
- ② 一人一人の子どもが、健康で安全に過ごせるようにする。
- ③ 一人一人の子どもの生理的欲求が、十分に満たされるようにする。
- ④ 一人一人の子どもの健康増進が、積極的に図られるようにする。

(イ) 内容

- ① 一人一人の子どもの平常の健康状態や発育及び発達状態を的確に把握し、異常を感じる場合は、速やかに適切に対応する。
- ② 家庭との連絡を密にし、嘱託医等との連携を図りながら、子どもの疾病や事故防止に関する認識を深め、保健的で安全な保育環境の維持及び向上に努める。
- ③ 清潔で安全な環境を整え、適切な援助や応答的な関わりを通して、子どもの生理的欲求を満たしていく。また、家庭と協力しながら、子どもの発達過程等に応じた適切な生活リズムがつけられていくようにする。
- ④ 子どもの発達過程等に応じて、適度な運動と休息をとることができるようにする。また、食事、排泄、睡眠、衣類の着脱、身の回りを清潔にすることなどについて、子どもが意欲的に生活できるよう適切に援助する。

イ 情緒の安定

(ア) ねらい

- ① 一人一人の子どもが、安定感を持って過ごせるようにする。
- ② 一人一人の子どもが、自分の気持ちを安心して表すことができるようにする。
- ③ 一人一人の子どもが、周囲から主体として受け止められ、主体として育ち、自分を肯定する気持ちが育まれていくようにする。
- ④ 一人一人の子どもの心身の疲れが癒されるようにする。

(イ) 内容

- ① 一人一人の子どもの置かれている状態や発達過程などを的確に把握し、子どもの欲求を適切に満たしながら、応答的な触れ合いや言葉がけを行う。
- ② 一人一人の子どもの気持ちを受容し、共感しながら、子どもとの継続的な信頼関係を築いていく。
- ③ 保育士等との信頼関係を基盤に、一人一人の子どもが主体的に活動し、自発性や探索意欲などを高めるとともに、自分への自信を持つことができるよう成長の過程を見守り、適切に働きかける。
- ④ 一人一人の子どもの生活リズム、発達過程、保育時間などに応じて、活動内容のバランスや調和を図りながら、適切な食事や休息がとれるようにする。

(2) 教育に関わるねらい及び内容

ア 健康

健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。

(ア) ねらい

- ① 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。
- ② 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。
- ③ 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。

(イ) 内容

- ① 保育士や友達と触れ合い、安定感を持って生活する。
- ② いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。
- ③ 進んで戸外で遊ぶ。
- ④ 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
- ⑤ 健康な生活のリズムを身に付け、楽しんで食事をする。
- ⑥ 身の回りを清潔にし、衣類の着脱、食事、排泄など生活に必要な活動を自分でする。
- ⑦ 保育所における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整える。
- ⑧ 自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。
- ⑨ 危険な場所や災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。

イ 人間関係

他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。

(ア) ねらい

- ① 保育所生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。
- ② 進んで身近な人と関わり、愛情や信頼感を持つ。
- ③ 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。

(イ) 内容

- ① 安心できる保育士との関係の下で、身近な大人や友達に関心を持ち、模倣して遊んだり、親しみを持って自ら関わろうとする。
- ② 保育士や友達との安定した関係の中で、共に過ごすことの喜びを味わう。
- ③ 自分で考え、自分で行動する。
- ④ 自分でできることは自分です。
- ⑤ 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。
- ⑥ 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
- ⑦ 友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。
- ⑧ 友達と一緒に活動する中で、協力して物事をやり遂げようとする気持ちを持つ。
- ⑨ 良いことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。
- ⑩ 身近な友達との関わりを深めるとともに、異年齢の友達など、様々な友達と関わり、思いやりや親しみを持つ。
- ⑪ 友達と楽しく生活する中で決まりの大切さに気付き、守ろうとする。
- ⑫ 共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。
- ⑬ 高齢者をはじめ地域の人々など自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみを持つ。
- ⑭ 外国人など、自分とは異なる文化を持った人に親しみを持つ。

ウ 環境

周囲の様々な環境に好奇心や探究心を持って関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。

(ア) ねらい

- ① 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ。
- ② 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- ③ 身近な事物を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

(イ) 内容

- ① 安心できる人的及び物的環境の下で、聞く、見る、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする。
- ② 好きな玩具や遊具に興味を持って関わり、様々な遊びを楽しむ。
- ③ 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- ④ 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心を持つ。
- ⑤ 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- ⑥ 自然などの身近な事象に関心を持ち、遊びや生活に取り入れようとする。
- ⑦ 身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てた

り、味わうなどして、生命の尊さに気付く。

- ⑧ 身近な物を大切にすること。
- ⑨ 身近な物や遊具に興味を持って関わり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- ⑩ 日常生活の中で数量や図形などに関心を持つ。
- ⑪ 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心を持つ。
- ⑫ 近隣の生活に興味や関心を持ち、保育所内外の行事などに喜んで参加する。

エ 言葉

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

(ア) ねらい

- ① 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- ② 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- ③ 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、保育士や友達と心を通わせる。

(イ) 内容

- ① 保育士の応答的な関わりや話しかけにより、自ら言葉を使おうとする。
- ② 保育士と一緒にごっこ遊びなどをする中で、言葉のやり取りを楽しむ。
- ③ 保育士や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、親しみを持って聞いたり、話したりする。
- ④ したこと、見たこと、聞いたこと、味わったこと、感じたこと、考えたことを自分なりに言葉で表現する。
- ⑤ したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
- ⑥ 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
- ⑦ 生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- ⑧ 親しみを持って日常のあいさつをする。
- ⑨ 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- ⑩ いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- ⑪ 絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう。
- ⑫ 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

オ 表現

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

(ア) ねらい

- ① いろいろな物の美しさなどに対する豊かな感性を持つ。
- ② 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- ③ 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

(イ) 内容

- ① 水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ。
- ② 保育士と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ。
- ③ 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、楽しんだりする。
- ④ 生活の中で様々な出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- ⑤ 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- ⑥ 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。
- ⑦ いろいろな素材や用具に親しみ、工夫して遊ぶ。
- ⑧ 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。
- ⑨ かいたり、つくったりすることを楽しみ、それを遊びに使ったり、飾ったりする。
- ⑩ 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わう。

2 保育の実施上の配慮事項

保育士等は、一人一人の子どもの発達過程やその連続性を踏まえ、ねらいや内容を柔軟に取り扱うとともに、特に、次の事項に配慮して保育しなければならない。

(1) 保育に関わる全般的な配慮事項

- ア 子どもの心身の発達及び活動の実態などの個人差を踏まえるとともに、一人一人の子どもの気持ちを受け止め、援助すること。
- イ 子どもの健康は、生理的、身体的な育ちとともに、自主性や社会性、豊かな感性の育ちとがあいまってもたらされることに留意すること。
- ウ 子どもが自ら周囲に働きかけ、試行錯誤しつつ自分の力で行う活動を見守りながら、適切に援助すること。
- エ 子どもの入所時の保育に当たっては、できるだけ個別に対応し、子どもが安定感を得て、次第に保育所の生活になじんでいくようにするとともに、既に入所している子どもに不安や動揺を与えないよう配慮すること。
- オ 子どもの国籍や文化の違いを認め、互いに尊重する心を育てるよう配慮すること。
- カ 子どもの性差や個人差にも留意しつつ、性別などによる固定的な意識を植え付けることがないよう配慮すること。

(2) 乳児保育に関わる配慮事項

- ア 乳児は疾病への抵抗力が弱く、心身の機能の未熟さに伴う疾病の発生が多いことから、一人一人の発育及び発達状態や健康状態についての適切な判断に基づく保健的な対応を行うこと。
- イ 一人一人の子どもの生育歴の違いに留意しつつ、欲求を適切に満たし、特定の保育士が応答的に関わるように努めること。

- ウ 乳児保育に関わる職員間の連携や嘱託医との連携を図り、第5章（健康及び安全）に示された事項を踏まえ、適切に対応すること。栄養士及び看護師等が配置されている場合は、その専門性をいかした対応を図ること。
- エ 保護者との信頼関係を築きながら保育を進めるとともに、保護者からの相談に応じ、保護者への支援に努めていくこと。
- オ 担当の保育士が変わる場合には、子どものそれまでの経験や発達過程に留意し、職員間で協力して対応すること。

(3) 3歳未満児の保育に関わる配慮事項

- ア 特に感染症にかかりやすい時期であるので、体の状態、機嫌、食欲などの日常の状態の観察を十分に行うとともに、適切な判断に基づく保健的な対応を心がけること。
- イ 食事、排泄、睡眠、衣類の着脱、身の回りを清潔にすることなど、生活に必要な基本的な習慣については、一人一人の状態に応じ、落ち着いた雰囲気の中で行うようにし、子どもが自分でしようとする気持ちを尊重すること。
- ウ 探索活動が十分できるように、事故防止に努めながら活動しやすい環境を整え、全身を使う遊びなど様々な遊びを取り入れること。
- エ 子どもの自我の育ちを見守り、その気持ちを受け止めるとともに、保育士が仲立ちとなって、友達の気持ちや友達との関わり方を丁寧に伝えていくこと。
- オ 情緒の安定を図りながら、子どもの自発的な活動を促していくこと。
- カ 担当の保育士が変わる場合には、子どものそれまでの経験や発達過程に留意し、職員間で協力して対応すること。

(4) 3歳以上児の保育に関わる配慮事項

- ア 生活に必要な基本的な習慣や態度を身に付けることの大切さを理解し、適切な行動を選択できるよう配慮すること。
- イ 子どもの情緒が安定し、自己を十分に発揮して活動することを通して、やり遂げる喜びや自信を持つことができるように配慮すること。
- ウ 様々な遊びの中で、全身を動かして意欲的に活動することにより、体の諸機能の発達が促されることに留意し、子どもの興味や関心が戸外にも向くようにすること。
- エ けんかなど葛藤を経験しながら次第に相手の気持ちを理解し、相互に必要な存在であることを実感できるよう配慮すること。
- オ 生活や遊びを通して、決まりがあることの大切さに気付き、自ら判断して行動できるよう配慮すること。
- カ 自然との触れ合いにより、子どもの豊かな感性や認識力、思考力及び表現力が培われることを踏まえ、自然との関わりを深めることができるよう工夫すること。
- キ 自分の気持ちや経験を自分なりの言葉で表現することの大切さに留意し、子どもの話しかけに応じるよう心がけること。また、子どもが仲間と伝え合ったり、話し合うことの楽しさが味わえるようにすること。
- ク 感じたことや思ったこと、想像したことなどを、様々な方法で創意工夫をこらし

て自由に表現できるよう、保育に必要な素材や用具をはじめ、様々な環境の設定に留意すること。

ケ 保育所の保育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに留意し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること。

第4章 保育の計画及び評価

保育所は、第1章（総則）に示された保育の目標を達成するために、保育の基本となる「保育課程」を編成するとともに、これを具体化した「指導計画」を作成しなければならない。

保育課程及び指導計画（以下、「保育の計画」という。）は、すべての子どもが、入所している間、安定した生活を送り、充実した活動ができるように、柔軟で発展的なものとし、また、一貫性のあるものとなるよう配慮することが重要である。

また、保育所は、保育の計画に基づいて保育し、保育の内容の評価及びこれに基づく改善に努め、保育の質の向上を図るとともに、その社会的責任を果たさなければならない。

1 保育の計画

（1）保育課程

ア 保育課程は、各保育所の保育の方針や目標に基づき、第2章（子どもの発達）に示された子どもの発達過程を踏まえ、前章（保育の内容）に示されたねらい及び内容が保育所生活の全体を通して、総合的に展開されるよう、編成されなければならない。

イ 保育課程は、地域の実態、子どもや家庭の状況、保育時間などを考慮し、子どもの育ちに関する長期的見通しを持って適切に編成されなければならない。

ウ 保育課程は、子どもの生活の連続性や発達の連続性に留意し、各保育所が創意工夫して保育できるよう、編成されなければならない。

（2）指導計画

ア 指導計画の作成

指導計画の作成に当たっては、次の事項に留意しなければならない。

（ア）保育課程に基づき、子どもの生活や発達を見通した長期的な指導計画と、それに関連しながら、より具体的な子どもの日々の生活に即した短期的な指導計画を作成して、保育が適切に展開されるようにすること。

（イ）子ども一人一人の発達過程や状況を十分に踏まえること。

（ウ）保育所の生活における子どもの発達過程を見通し、生活の連続性、季節の変化などを考慮し、子どもの実態に即した具体的なねらい及び内容を設定すること。

（エ）具体的なねらいが達成されるよう、子どもの生活する姿や発想を大切にして適切な環境を構成し、子どもが主体的に活動できるようにすること。

イ 指導計画の展開

指導計画に基づく保育の実施に当たっては、次の事項に留意しなければならない。

（ア）施設長、保育士などすべての職員による適切な役割分担と協力体制を整えること。

（イ）子どもが行う具体的な活動は、生活の中で様々に変化することに留意して、子どもが望ましい方向に向かって自ら活動を展開できるよう必要な援助を行うこと。

（ウ）子どもの主体的な活動を促すためには、保育士等が多様な関わりを持つことが

重要であることを踏まえ、子どもの情緒の安定や発達に必要な豊かな体験が得られるよう援助すること。

- (エ) 保育士等は、子どもの実態や子どもを取り巻く状況の変化などに即して保育の過程を記録するとともに、これらを踏まえ、指導計画に基づく保育の内容の見直しを行い、改善を図ること。

(3) 指導計画の作成上、特に留意すべき事項

指導計画の作成に当たっては、第2章（子どもの発達）、前章（保育の内容）及びその他の関連する章に示された事項を踏まえ、特に次の事項に留意しなければならない。

ア 発達過程に応じた保育

- (ア) 3歳未満児については、一人一人の子どもの生育歴、心身の発達、活動の実態等に即して、個別的な計画を作成すること。
- (イ) 3歳以上児については、個の成長と、子ども相互の関係や協同的な活動が促されるよう配慮すること。
- (ウ) 異年齢で構成される組やグループでの保育においては、一人一人の子どもの生活や経験、発達過程などを把握し、適切な援助や環境構成ができるよう配慮すること。

イ 長時間にわたる保育

長時間にわたる保育については、子どもの発達過程、生活のリズム及び心身の状態に十分配慮して、保育の内容や方法、職員の協力体制、家庭との連携などを指導計画に位置付けること。

ウ 障害のある子どもの保育

- (ア) 障害のある子どもの保育については、一人一人の子どもの発達過程や障害の状態を把握し、適切な環境の下で、障害のある子どもが他の子どもとの生活を通して共に成長できるよう、指導計画の中に位置付けること。また、子どもの状況に応じた保育を実施する観点から、個別の支援計画を作成するなど適切な対応を図ること。
- (イ) 保育の展開に当たっては、その子どもの発達の状況や日々の状態によっては、指導計画にとらわれず、柔軟に保育したり、職員の連携体制の中で個別の関わりが十分行えるようにすること。
- (ウ) 家庭との連携を密にし、保護者との相互理解を図りながら、適切に対応すること。
- (エ) 専門機関との連携を図り、必要に応じて助言等を得ること。

エ 小学校との連携

- (ア) 子どもの生活や発達の連続性を踏まえ、保育の内容の工夫を図るとともに、就学に向けて、保育所の子どもと小学校の児童との交流、職員同士の交流、情報共有や相互理解など小学校との積極的な連携を図るよう配慮すること。
- (イ) 子どもに関する情報共有に関して、保育所に入所している子どもの就学に際し、市町村の支援の下に、子どもの育ちを支えるための資料が保育所から小学校へ送

付されるようにすること。

オ 家庭及び地域社会との連携

子どもの生活の連続性を踏まえ、家庭及び地域社会と連携して保育が展開されるよう配慮すること。その際、家庭や地域の機関及び団体の協力を得て、地域の自然、人材、行事、施設等の資源を積極的に活用し、豊かな生活体験をはじめ保育内容の充実が図られるよう配慮すること。

2 保育の内容等の自己評価

(1) 保育士等の自己評価

- ア 保育士等は、保育の計画や保育の記録を通して、自らの保育実践を振り返り、自己評価することを通して、その専門性の向上や保育実践の改善に努めなければならない。
- イ 保育士等による自己評価に当たっては、次の事項に留意しなければならない。
 - (ア) 子どもの活動内容やその結果だけでなく、子どもの心の育ちや意欲、取り組む過程などに十分配慮すること。
 - (イ) 自らの保育実践の振り返りや職員相互の話し合い等を通じて、専門性の向上及び保育の質の向上のための課題を明確にするとともに、保育所全体の保育の内容に関する認識を深めること。

(2) 保育所の自己評価

- ア 保育所は、保育の質の向上を図るため、保育課程及び指導計画の展開や保育士等の自己評価を踏まえ、当該保育所の保育の内容等について、自ら評価を行い、その結果を公表するよう努めなければならない。
- イ 保育所の自己評価を行うに当たっては、次の事項に留意しなければならない。
 - (ア) 地域の実情や保育所の実態に即して、適切に評価の観点や項目等を設定し、全職員による共通理解をもって取り組むとともに、評価の結果を踏まえ、当該保育所の保育の内容等の改善を図ること。
 - (イ) 児童福祉施設最低基準第36条の趣旨を踏まえ、保育の内容等の評価に関し、保護者及び地域住民等の意見を聞くことが望ましいこと。

第5章 健康及び安全

子どもの健康及び安全は、子どもの生命の保持と健やかな生活の基本であり、保育所においては、一人一人の子どもの健康の保持及び増進並びに安全の確保とともに、保育所の子ども集団全体の健康及び安全の確保に努めなければならない。また、子どもが、自らの体や健康に関心を持ち、心身の機能を高めていくことが大切である。このため、保育所は、第1章（総則）、第3章（保育の内容）等の関連する事項に留意し、次に示す事項を踏まえ、保育しなければならない。

1 子どもの健康支援

(1) 子どもの健康状態並びに発育及び発達状態の把握

- ア 子どもの心身の状態に応じて保育するために、子どもの健康状態並びに発育及び発達状態について、定期的、継続的に、また、必要に応じて随時、把握すること。
- イ 保護者からの情報とともに、登所時及び保育中を通じて子どもの状態を観察し、何らかの疾病が疑われる状態や傷害が認められた場合には、保護者に連絡するとともに、嘱託医と相談するなど適切な対応を図ること。
- ウ 子どもの心身の状態等を観察し、不適切な養育の兆候が見られる場合には、市町村や関係機関と連携し、要保護児童対策地域協議会で検討するなど適切な対応を図ること。また、虐待が疑われる場合には、速やかに市町村又は児童相談所に通告し、適切な対応を図ること。

(2) 健康増進

- ア 子どもの健康に関する保健計画を作成し、全職員がそのねらいや内容を明確にししながら、一人一人の子どもの健康の保持及び増進に努めていくこと。
- イ 子どもの心身の健康状態や疾病等の把握のために、嘱託医等により定期的に健康診断を行い、その結果を記録し、保育に活用するとともに、保護者に連絡し、保護者が子どもの状態を理解し、日常生活に活用できるようにすること。

(3) 疾病等への対応

- ア 保育中に体調不良や傷害が発生した場合には、その子どもの状態等に応じて、保護者に連絡するとともに、適宜、嘱託医や子どものかかりつけ医等と相談し、適切な処置を行うこと。看護師等が配置されている場合には、その専門性をいかした対応を図ること。
- イ 感染症やその他の疾病の発生予防に努め、その発生や疑いがある場合には、必要に応じて嘱託医、市町村、保健所等に連絡し、その指示に従うとともに、保護者や全職員に連絡し、協力を求めること。また、感染症に関する保育所の対応方法等について、あらかじめ関係機関の協力を得ておくこと。看護師等が配置されている場合には、その専門性をいかした対応を図ること。
- ウ 子どもの疾病等の事態に備え、医務室等の環境を整え、救急用の薬品、材料等を常備し、適切な管理の下に全職員が対応できるようにしておくこと。

2 環境及び衛生管理並びに安全管理

(1) 環境及び衛生管理

ア 施設の温度、湿度、換気、採光、音などの環境を常に適切な状態に保持するとともに、施設内外の設備及び用具等の衛生管理に努めること。

イ 子ども及び職員が、手洗い等により清潔を保つようにするとともに、施設内外の保健的環境の維持及び向上に努めること。

(2) 事故防止及び安全対策

ア 保育中の事故防止のために、子どもの心身の状態等を踏まえつつ、保育所内外の安全点検に努め、安全対策のために職員の共通理解や体制づくりを図るとともに、家庭や地域の諸機関の協力の下に安全指導を行うこと。

イ 災害や事故の発生に備え、危険箇所の点検や避難訓練を実施するとともに、外部からの不審者等の侵入防止のための措置や訓練など不測の事態に備えて必要な対応を図ること。また、子どもの精神保健面における対応に留意すること。

3 食育の推進

保育所における食育は、健康な生活の基本としての「食を営む力」の育成に向け、その基礎を培うことを目標として、次の事項に留意して実施しなければならない。

(1) 子どもが生活と遊びの中で、意欲を持って食に関わる体験を積み重ね、食べることを楽しみ、食事を楽しみ合う子どもに成長していくことを期待するものであること。

(2) 乳幼児期にふさわしい食生活が展開され、適切な援助が行われるよう、食事の提供を含む食育の計画を作成し、保育の計画に位置付けるとともに、その評価及び改善に努めること。

(3) 子どもが自らの感覚や体験を通して、自然の恵みとしての食材や調理する人への感謝の気持ちが育つように、子どもと調理員との関わりや、調理室など食に関わる保育環境に配慮すること。

(4) 体調不良、食物アレルギー、障害のある子どもなど、一人一人の子どもの心身の状態等に応じ、嘱託医、かかりつけ医等の指示や協力の下に適切に対応すること。栄養士が配置されている場合は、専門性をいかした対応を図ること。

4 健康及び安全の実施体制等

施設長は、入所する子どもの健康及び安全に最終的な責任を有することにかんがみ、この章の1から3に規定する事項が保育所において適切に実施されるように、次の事項に留意し、保育所における健康及び安全の実施体制等の整備に努めなければならない。

(1) 全職員が健康及び安全に関する共通理解を深め、適切な分担と協力の下に年間を通じて計画的に取り組むこと。

- (2) 取組の方針や具体的な活動の企画立案及び保育所内外の連絡調整の業務について、専門的職員が担当することが望ましいこと。栄養士、看護師等が配置されている場合には、その専門性をいかして業務に当たること。
- (3) 保護者と常に密接な連携を図るとともに、保育所全体の方針や取組について、周知するよう努めること。
- (4) 市町村の支援の下に、地域の関係機関等との日常的な連携を図り、必要な協力が得られるよう努めること。

第6章 保護者に対する支援

保育所における保護者への支援は、保育士等の業務であり、その専門性をいかした子育て支援の役割は、特に重要なものである。保育所は、第1章（総則）に示されているように、その特性をいかし、保育所に入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭への支援について、職員間の連携を図りながら、次の事項に留意して、積極的に取り組むことが求められる。

1 保育所における保護者に対する支援の基本

- (1) 子どもの最善の利益を考慮し、子どもの福祉を重視すること。
- (2) 保護者とともに、子どもの成長の喜びを共有すること。
- (3) 保育に関する知識や技術などの保育士の専門性や、子どもの集団が常に存在すること等の保育環境など、保育所の特性をいかすこと。
- (4) 一人一人の保護者の状況を踏まえ、子どもと保護者の安定した関係に配慮して、保護者の養育力の向上に資するよう、適切に支援すること。
- (5) 子育て等に関する相談や助言に当たっては、保護者の気持ちを受け止め、相互の信頼関係を基本に、保護者一人一人の自己決定を尊重すること。
- (6) 子どもの利益に反しない限りにおいて、保護者や子どものプライバシーの保護、知り得た事柄の秘密保持に留意すること。
- (7) 地域の子育て支援に関する資源を積極的に活用するとともに、子育て支援に関する地域の関係機関、団体等との連携及び協力を図ること。

2 保育所に入所している子どもの保護者に対する支援

- (1) 保育所に入所している子どもの保護者に対する支援は、子どもの保育との密接な関連の中で、子どもの送迎時の対応、相談や助言、連絡や通信、会合や行事など様々な機会を活用して行うこと。
- (2) 保護者に対し、保育所における子どもの様子や日々の保育の意図などを説明し、保護者との相互理解を図るよう努めること。
- (3) 保育所において、保護者の仕事と子育ての両立等を支援するため、通常の保育に加えて、保育時間の延長、休日、夜間の保育、病児・病後児に対する保育など多様な保育を実施する場合には、保護者の状況に配慮するとともに、子どもの福祉が尊重されるよう努めること。

- (4) 子どもに障害や発達上の課題が見られる場合には、市町村や関係機関と連携及び協力を図りつつ、保護者に対する個別の支援を行うよう努めること。
- (5) 保護者に育児不安等が見られる場合には、保護者の希望に応じて個別の支援を行うよう努めること。
- (6) 保護者に不適切な養育等が疑われる場合には、市町村や関係機関と連携し、要保護児童対策地域協議会で検討するなど適切な対応を図ること。また、虐待が疑われる場合には、速やかに市町村又は児童相談所に通告し、適切な対応を図ること。

3 地域における子育て支援

- (1) 保育所は、児童福祉法第48条の3に基づき、その行う保育に支障がない限りにおいて、地域の実情や当該保育所の体制等を踏まえ、次に掲げるような地域の保護者等に対する子育て支援を積極的に行うよう努めること。
 - ア 地域の子育ての拠点としての機能
 - (ア) 子育て家庭への保育所機能の開放（施設及び設備の開放、体験保育等）
 - (イ) 子育て等に関する相談や援助の実施
 - (ウ) 子育て家庭の交流の場の提供及び交流の促進
 - (エ) 地域の子育て支援に関する情報の提供
 - イ 一時保育
- (2) 市町村の支援を得て、地域の関係機関、団体等との積極的な連携及び協力を図るとともに、子育て支援に関わる地域の人材の積極的な活用を図るよう努めること。
- (3) 地域の要保護児童への対応など、地域の子どもをめぐる諸課題に対し、要保護児童対策地域協議会など関係機関等と連携、協力して取り組むよう努めること。

第7章 職員の資質向上

第1章（総則）から前章（保護者に対する支援）までに示された事項を踏まえ、保育所は、質の高い保育を展開するため、絶えず、一人一人の職員についての資質向上及び職員全体の専門性の向上を図るよう努めなければならない。

1 職員の資質向上に関する基本的事項

職員の資質向上に関しては、次の事項に留意して取り組むよう努めなければならない。

- (1) 子どもの最善の利益を考慮し、人権に配慮した保育を行うためには、職員一人一人の倫理観、人間性並びに保育所職員としての職務及び責任の理解と自覚が基盤となること。
- (2) 保育所全体の保育の質の向上を図るため、職員一人一人が、保育実践や研修などを通じて保育の専門性などを高めるとともに、保育実践や保育内容に関する職員の共通理解を図り、協働性を高めていくこと。
- (3) 職員同士の信頼関係とともに、職員と子ども及び職員と保護者との信頼関係を形成していく中で、常に自己研鑽に努め、喜びや意欲を持って保育に当たること。

2 施設長の責務

施設長は、保育の質及び職員の資質の向上のため、次の事項に留意するとともに、必要な環境の確保に努めなければならない。

- (1) 施設長は、保育所の役割や社会的責任を遂行するために、法令等を遵守し、保育所を取り巻く社会情勢などを踏まえ、その専門性等の向上に努めること。
- (2) 第4章（保育の計画及び評価）の2の(1)（保育士等の自己評価）及び(2)（保育所の自己評価）等を踏まえ、職員が保育所の課題について共通理解を深め、協力して改善に努めることができる体制をつくること。
- (3) 職員及び保育所の課題を踏まえた保育所内外の研修を体系的、計画的に実施するとともに、職員の自己研鑽に対する援助や助言に努めること。

3 職員の研修等

- (1) 職員は、子どもの保育及び保護者に対する保育に関する指導が適切に行われるように、自己評価に基づく課題等を踏まえ、保育所内外の研修等を通じて、必要な知識及び技術の修得、維持並びに向上に努めなければならない。
- (2) 職員一人一人が課題を持って主体的に学ぶとともに、他の職員や地域の関係機関など、様々な人や場との関わりの中で共に学び合う環境を醸成していくことにより、保育所の活性化を図っていくことが求められる。

保育所保育指針案	修正理由等
<p>第1章 総則</p> <p>1 趣旨</p> <p>(1) この指針は、児童福祉施設最低基準（昭和23年厚生省令第63号）第35条に基づき、保育所における保育の内容に関する事項及びこれに関連する運営に関する事項を定めるものである。</p> <p>(2) 各保育所は、この指針において規定される保育の内容に係る基本原則に関する事項等を踏まえ、各保育所の実情に応じて創意工夫を図り、保育所の機能及び質の向上に努めなければならない。</p> <p>2 保育所の役割</p> <p>(1) 保育所は、児童福祉法（昭和22年法律第164号）第39条に基づき、保育に欠ける乳幼児の保育を行い、その健全な心身の発達を図ることを目的とする児童福祉施設であり、入所する子どもの最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進することに最もふさわしい生活の場でなければならない。</p> <p>(2) 保育所は、その目的を達成するために、保育に関する専門性を有する職員が、家庭との緊密な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている。</p> <p>(3) 保育所は、入所する子どもを保育するとともに、家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら、入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭に対する支援等を行う役割を担うものである。</p> <p>(4) 保育所における保育士は、児童福祉法第18条の4を踏まえ、保育所の役割及び機能が適切に発揮されるように、倫理観に裏付けられた専門的知識、技術及び判断をもって、子どもを保育するとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものである。</p> <p>3 保育の原理</p> <p>(1) 保育の目標</p> <p>ア 保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である。このため、保育所の保育は、子どもが現在を最も良く生き、望</p>	<p>◎ (2) 保育所は、その目的を達成するために、保育に関する専門性を有する職員が、<u>保護者の意向を受け止め</u>、家庭との緊密な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている。</p> <p>↑</p> <p>ここに、「保護者の意向」を挿入したらどうかという意見をいただいたが、「家庭との緊密な連携」を図るために当然、保護者の意向を受け止めることや相互理解が必要であり、あえて盛り込む必要はないのではないか。（次項の（1）ーイ、（2）ーカに「保護者の意向」とある。ここだけでは保育課程の編成と関連する重要な事項として弱いというご意見であるが、解説書に反映させていく）</p>

ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために、次の目標を目指して行わなければならない。

- (ア) 十分に養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満たし、生命の保持及び情緒の安定を図ること。
- (イ) 健康、安全など生活に必要な基本的な習慣や態度を養い、心身の健康の基礎を培うこと。
- (ウ) 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にすることを育てるとともに、自主、自立及び協調の態度を養い、道徳性の芽生えを培うこと。
- (エ) 生命、自然及び社会の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うこと。
- (オ) 生活の中で、言葉への興味や関心を育て、話したり、聞いたり、相手の話を理解しようとするなど、言葉の豊かさを養うこと。
- (カ) 様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと。

イ 保育所は、入所する子どもの保護者に対し、その意向を受け止め、子どもと保護者の安定した関係に配慮し、保育所の特性や保育士等の専門性をいかして、その援助に当たらなければならない。

(2) 保育の方法

保育の目標を達成するために、保育士等は、次の事項に留意して保育しなければならない。

- ア 一人一人の子どもの状況や家庭及び地域社会での生活の実態を把握するとともに、子どもが安心感と信頼感を持って活動できるよう、子どもの主体としての思いや願いを受け止めること。
- イ 子どもの生活リズムを大切にし、健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境や、自己を十分に発揮できる環境を整えること。
- ウ 子どもの発達について理解し、一人一人の発達過程に応じて保育すること。その際、子どもの個人差に十分配慮すること。
- エ 子ども相互の関係づくりや互いに尊重する心を大切に、集団における活動を効果あるものにするよう援助すること。

◎「意向」はそのまま使用する。まず何より受け止めることは必要であり、その上でどのように対応し、どのように返していくかが重要である。保護者の要求をすべて受け入れることではない、保育の専門性を発揮した適切な対応が必要である等、解説書で説明する。

◎前回までの案で、4章と6章で使われていた「保護者の意向の「意向」は言葉を換える、又は削除する。(4章、6章参照)総則において全章に通ずる基本的考え方として示すことにする。

オ 子どもが自発的、意欲的に関われるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。特に、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること。

カ 一人一人の保護者の状況やその意向を理解、受容し、それぞれの親子関係や家庭生活等に配慮しながら、様々な機会をとらえ、適切に援助すること。

(3) 保育の環境

保育の環境には、保育士や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、更には自然や社会の事象などがある。保育所は、こうした人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものとなるよう、次の事項に留意しつつ、計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない。

ア 子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくことができるよう配慮すること。

イ 子どもの活動が豊かに展開されるよう、保育所の設備や環境を整え、保育所の保健的環境や安全の確保などに努めること。

ウ 保育室は、温かな親しみとくつろぎの場となるとともに、生き生きと活動できる場となるように配慮すること。

エ 子どもが人と関わる力を育てていくため、子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整えること。

4 保育所の社会的責任

(1) 保育所は、子どもの人権に十分配慮するとともに、子ども一人一人の人格を尊重して保育の実施に当たらを行わなければならない。

(2) 保育所は、地域社会との交流や連携を図り、保護者や地域社会に、当該保育所が行う保育の内容を適切に説明するよう努めなければならない。

(3) 保育所は、入所する子ども等の個人情報¹を適切に取り扱うとともに、保護者の苦情などに対し、その解決を図るよう努めなければならない。

◎「意向」－前述同様

※保育所の特性や社会的責任についてより厚味を持たせたい。また、日常的な対応や実践の中で取り組むことの重要性を強調する。

※(1)「保育の実施に当たる」という言い方より「保育を行う」の方が一般的。

第2章 子どもの発達

子どもの発達は、様々な環境との相互作用により促され発達していく。すなわち、子どもの発達とは、子どもがそれまでの体験を基にして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身に付け、新たな知識及び能力を獲得していく過程である。特に大切なのは、人との関わりであり、愛情豊かで思慮深い大人による保護や世話などを通して、大人と子どもの相互の関わりが十分に行われることが重要である。この関係を起点として、次第に他の子どもとの間でも相互に働きかけ、関わりを深め、人への信頼感と自己の主体性を形成していくのである。

これらのことを踏まえ、保育士等は、次に示す子どもの発達の特性や発達過程を理解し、発達及び生活の連続性に配慮して保育しなければならない。その際、保育士等は、子どもと生活や遊びを共にする中で、一人一人の子どもの心身の状態を把握しながら、その発達の援助を行うことが必要である。

1 乳幼児期の発達の特性

- (1) 子どもは、大人によって生命を守られ、愛され、信頼されることにより、情緒が安定するとともに、人への信頼感が育つ。そして、身近な環境（人、自然、事物、出来事など）に興味や関心を持ち、自発的に働きかけるなど、次第に自我が芽生える。
- (2) 子どもは、子どもを取り巻く環境に主体的に関わることにより、心身の発達が促される。
- (3) 子どもは、大人との信頼関係を基にして、子ども同士の関係を持つようになる。この相互の関わりを通じて、身体的な発達及び知的な発達とともに、情緒的、社会的及び道徳的な発達が促される。
- (4) 乳幼児期は、生理的、身体的な諸条件や生育環境の違いにより、一人一人の心身の発達の個人差が大きい。
- (5) 子どもは、遊びを通して、仲間との関係を育み、その中で個の成長も促される。
- (6) 乳幼児期は、生涯にわたる生きる力の基礎が培われる時期であり、特に身体感覚を伴う多様な活動を経験する経験が積み重なることによって、豊かな感性とともに好奇心、探究心や思考力が養われる。また、それらがその後の生活や学びの基礎になる。

2 発達過程

子どもの発達過程は、おおむね次に示す8つの区分としてとらえられる。ただし、この区

※子どもの発達をよりわかりやすく説明。また、「知識」と「能力」を並べるのは不相当であり知識を削除。能力の中に知識なども含まれる。

※(6) 多様な「活動」ではなく「経験の積み重ね」が重要である。

分は、同年齢の子どもの均一的な発達の基準ではなく、一人一人の子どもの発達過程としてとらえるべきものである。また、様々な条件により、子どもに発達の遅れ上の課題や保育所の生活に慣れなじみにくいなどの状態が見られても、保育士等は、子ども自身の力を十分に認め、一人一人の発達過程や心身の状態に応じた適切な援助及び環境構成を行うことが重要である。

(1) おおむね6か月未満

誕生後、母体内から外界への急激な環境の激変変化に適応し、体重や身長が増加するなど、著しい発達が見られる。首がすわり、手足の動きが活発になり、その後、寝返り、腹ばいなど全身の動きが活発になる。視覚、聴覚などの感覚の発達はめざましく、泣く、笑うなどの表情の変化や体の動き、なん語などで自分の欲求を表現し、これに応答的に関わる特定の大人との間に情緒的な絆が形成される。

(2) おおむね6か月から1歳3か月未満

座る、はう、立つ、つたい歩きといった運動機能が発達すること、及び手を自由に腕や手先を意図的に動かせる使えるようになることにより、周囲の人や物に興味を示し、探索活動が活発になる。特定の大人との応答的な関わりにより、情緒的な絆が深まり、あやしてもらおうと喜ぶなどやり取りが盛んになる一方で、人見知りをするようになる。また、身近な大人との関係の中で、自分の意思や欲求を身振りなどで伝えようとし、大人から自分に向けられた気持ちや簡単な言葉がわかるようになる。食事は、離乳食から幼児食へ徐々に移行する。

(3) おおむね1歳3か月から2歳未満

歩き始め、手を使い、言葉を話すようになることにより、身近な人や身の回りの物に自発的に働きかけていく。歩く、押す、つまむ、めくるなど様々な運動機能の発達や新しい行動の獲得により、環境に働きかける意欲を一層高める。その中で、物をやり取りしたり、取り合ったりする姿が見られるとともに、玩具等を実物に見立てるなどの象徴機能が発達し、人や物との関わりが強まる。また、大人の言うことが分かるようになり、自分の意思を親しい大人に伝えたいという欲求が高まる。指差し、身振り、片言などを盛んに使うようになり、二語文を話し始める。

(4) おおむね2歳

※「遅れ」ではなく「発達上の課題」にする。また、「なじみにくい」方が子どもの実態に近く適切。

※(1)「激変」をこういう文脈で使用するのは不適当。

※(2) 正確に表現

※(3) 何の意欲か示す

歩く、走る、跳ぶなどの基本的な運動機能や、指先の機能が発達する。それに伴い、食事、衣類の着脱など身の回りのことを自分でしようとする。また、排泄の自立のための身体的機能も整ってくる。発声が明瞭になり、語いも著しく増加し、自分の意思や欲求を言葉で表出できるようになる。行動範囲が広がり探索活動が盛んになる中、自我の育ちの表れとして、強く自己主張する姿が見られる。盛んに模倣し、物事間の共通性を見いだすことができるようになるとともに、象徴機能の発達により、大人と一緒に簡単なごっこ遊びを楽しむようになる。

(5) おおむね3歳

基本的な運動機能が伸び、それに伴い、食事、排泄、衣類の着脱などもほぼ自立できるようになる。話し言葉の基礎ができて、盛んに質問するなど知的興味や関心が高まる。自我がよりはっきりしてくるとともに、友達との関わりが多くなるが、実際には、同じ遊び同じ場所で同じような遊びをそれぞれが楽しんでいる平行遊びであることが多い。大人の行動や日常生活において経験したことをごっこ遊びに取り入れたり、象徴機能や観察力を発揮して、遊びの内容に発展性が見られるようになる。予想や意図、期待を持って行動できるようになる。

(6) おおむね4歳

全身のバランスを取る能力が発達し、体の動きが巧みになる。自然など身近な環境に積極的に関わり、様々な物の特性を知り、それらとの関わり方や遊び方を体得していく。想像力が豊かになり、目的を持って行動し、作ったり、描いたり、試したりするようになるが、自分の行動やその結果を予測して不安になるなどの葛藤も経験する。仲間とのつながりが強くなる中で、けんかも増えてくる。その一方で、決まりの大切さに気付き、守ろうとするようになる。情感感情が豊かになり、身近な人の気持ちを察し、少しずつ自分の気持ちを抑えられたり、我慢ができるようになってくる。

(7) おおむね5歳

基本的な生活習慣が身に付き、運動機能はますます伸び、喜んで運動遊びをしたり、仲間とともに活発に遊ぶ。言葉によって共有のイメージを持って遊んだり、目的に向かって集団で行動することが増える。さらに、遊びを発展させ、楽しむために、自分たちで決まりをつくったりする。また、自分なりに考えて判断したり、批判する力が生まれ、けん

※(5) 平行遊びの説明をより正確に。

※(6) 「情感」はやや大人の表現であり「感情」の方が
適当

※(7) おおむね5歳

…。言葉によって共有のイメージを持って遊んだり、目的に向かって集団で行動することが増える。

↑「て」の重複を避ける。

<p>かを自分たちで解決しようとするなど、お互いに相手を許したり、異なる思いや考えを認めたりといった社会生活に必要な基本的な力を身に付けていく。他人の役に立つことを嬉しく感じたりして、仲間の中の一人としての自覚が生まれる。</p> <p>(8) おおむね6歳</p> <p>全身運動が滑らかで巧みになり、快活に跳び回るようになる。これまでの体験から、自信や、予想や見通しを立てる力が育ち、心身ともに力があふれ、意欲が旺盛になる。間意思を大切にしようとし、役割の分担が生まれるような共同遊びやごっこ遊びを行い、満足するまで取り組もうとする。様々な知識や経験をいかし、創意工夫を重ね、遊びを発展させる。思考力や認識力も高まり、文字や社会事象、自然事象、<u>自然事象や社会事象、文字などへの興味や関心も深まっていく。自立心が一層高まっていくが、身近な大人に甘えてくることもある。身近な大人に甘え、気持ちを休めることもあるが、様々な体験を通して自立心が一層高まっていく。</u></p> <p>第3章 保育の内容</p> <p>保育の内容は、「ねらい」及び「内容」で構成される。「ねらい」は、第1章（総則）に示された保育の目標をより具体化したものであり、子どもが保育所において、安定した生活を送り、充実した活動ができるように、保育士等が行わなければならない事項及び子どもが身に付けることが望まれる心情、意欲、態度などの事項を示したものである。また、「内容」は、これらの「ねらい」を達成するために、子どもの生活やその状況に応じて保育士等が<u>適切</u>に行うべき事項と、<u>保育士等が援助して、子どもが環境に関わって経験し、展開する具体的な活動</u>などのする事項を示したものである。</p> <p>保育士等が、上記の「ねらい」及び「内容」を具体的に把握するための視点として、「養護に関わるねらい及び内容」と「教育に関わるねらい及び内容」との両面から示しているが、実際の保育においては、養護と教育が一体となって展開されることに留意することが必要である。</p> <p>ここにいう「養護」とは、子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わりである。また、「教育」とは、子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助であり、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」及び「表</p>	<p>※（7）何を認めるのか示す</p> <p>※子どもの実態に合わせて順序を変更</p> <p>※（8）6歳児の姿として、最後は自立心の高まりを示した方が適切。</p> <p>※ ねらいと内容、養護と挙育 それぞれに的確に説明。</p> <p>※「内容」について「適切」を追記。また「展開する具体的な活動」ではなく「<u>経験する事項</u>」とする。</p>
---	---

現」の5領域から構成される。この5領域並びに「生命の保持」及び「情緒の安定」に関わる保育の内容は、子どもの生活や遊びを通して相互に関連を持ちながら、総合的に展開されるものである。

1 保育のねらい及び内容

(1) 養護に関わるねらい及び内容

ア 生命の保持

(ア) ねらい

- ① 一人一人の子どもの心身の状態を把握し、疾病等の発見に努め、が、快適に生活できるようにする。
- ② 疾病等の発生の予防や事故防止などに努め、必要に応じ、適切に対応一人一人の子どもが、健康で安全に過ごせるようにする。
- ③ 保健的で安全な環境の下で、一人一人の子どもの生理的欲求を十分に満たす。が、十分に満たされるようにする。
- ④ 適度な運動及び休息並びに食生活の充実を通して、積極的に一人一人の子どもの健康増進が積極的を図る。に図られるようにする。
- ⑤ 健康、安全に過ごすために必要な基本的な習慣や態度を身に付けることができるようにする。

(イ) 内容

- ① 一人一人の子どもの平常の健康状態や発育及び発達状態を的確に把握し、異常を感じる場合は、速やかに適切に対応する。また、子どもが自分から体の異常等を訴えることができるようにする。
- ② 家庭との連絡を密にし、嘱託医等との連携を図り、家庭との連絡を密にしながら、子どもの疾病や事故防止に関する認識を深め、施設内の保健的で安全な保育環境の維持及び向上に努める。
- ③ 常に清潔で安全な環境を整え、適切な世話や援助や応答的な関わりを通して、一人一人の子どもの生理的欲求を満たしていく。また、家庭と協力しながら、子どもの発達過程等に応じた適切な生活リズムがつくられていくようにする。
- ④ 子どもの発達過程等に応じて、適度な運動と休息をとることができるようにする。

※「保育の内容」についての説明である。

※(ア)ねらいと(イ)内容について、概念の違いによる書き分けや重複を避けることが必要。ねらいと、ねらいを達成するために保育士等が適切に行う事項(内容)を照合させる。

※⑤のねらい及び内容は「教育に関わる内容」の「健康」と重複するため割愛。このため、ア生命の保持に関わるねらい(ア)として以下の4点を示す。

- ① 快適に生活できるようにする
- ② 健康で安全に過ごせるようにする
- ③ 生理的欲求が十分に満たされるようにする
- ④ 健康増進が積極的に図られるようにする

- ①のねらいに対して①の内容～子どもが快適に過ごすための保育士等の援助、速やかで適切な対応
- ②のねらいに対して②の内容～子どもの健康、安全を守るための保育士等の援助、対応
- ③のねらいに対して③の内容～子どもの生理的欲求を満たすための保育士等の援助、応答的な関わり(「世話」は保育としてあまり適当でないので援助に変更)
- ④のねらいに対して④の内容～健康増進のための保育士等の援助、関わり

※②について実際には「家庭」が先である。

また、楽しい雰囲気の中で食事ができるようにする。食事、排泄、睡眠、衣類の着脱、身の回りを清潔にすることなどについて、適切に援助しながら、子どもが意欲的に生活できるよう適切に援助する。

- ⑤ ~~食事、排泄、睡眠、衣類の着脱、身の回りを清潔にすることなどについて、自分でしようとする気持ちを大切に、十分に見守り、適切に援助しながら、子どもが意欲的に生活できるようにする。~~

イ 情緒の安定

(ア) ねらい

- ① 一人一人の子どもに適切な保護や世話をし、子どもが安定感を持って過ごせるようにする。
- ② 一人一人の子どもが、保育士等との信頼関係の中で、自分の気持ちを安心して表すことができるようにする。
- ③ 一人一人の子どもが、周囲から主体として受け止められ、主体として育っていくことができるよう、子ども自らが行う活動を重視し、適切に応じていく。ち、自分を肯定する気持ちが育まれていくようにする。
- ④ 活動内容のバランスや調和を図りながら、適切な食事や休息をとり、一人一人の子どもの心身の疲れを癒すが癒されるように努めする。。

(イ) 内容

- ① 一人一人の子どもの置かれている状態や発達過程などを的確に把握し、子どもが安心できるような触れ合いや言葉がけを行う。子どもの欲求を適切に満たしながら、**応答的な触れ合いや言葉がけを行う。**
- ② ~~温かい雰囲気の中で適切な保護や世話をし、応答的な関わりを通して、子どもの欲求を満たしていく。~~
- ③② 一人一人の子どもの気持ちを温かく受容し、子どもが安心して自分の気持ちを表出できるようにする。共感しながら、子どもとの継続的な信頼関係が築かれるようにするを築いていく。
- ④③ 保育士等との信頼関係を基盤に、一人一人の子どもが主体的に活動し、自発性や探索意欲などを高めるとともに、自分への自信を持つことができるよう成長の過程

※「内容」は保育士等が適切に行う事項であり、できるだけ保育士等が「行う」事項として規定した書きぶりにした方がよい。

イ 情緒の安定についても、生命の保持同様、重複を避け、簡潔に示す。情緒の安定に関わるねらい（ア）として以下の4点。

- ①安定感を持って過ごせるようにする。
- ②自分の気持ちを安心して表すことができるようにする。
- ③自己肯定感が育まれていくようにする。
- ④心身の疲れが癒されるようにする。

①のねらいに対して①の内容～子どもが安定感を持って過ごせるための保育士等の援助、関わり（欲求を満たす、応答的な触れ合いや言葉がけ）

②のねらいに対して②の内容～子どもが自分の気持ちを表すための保育士等の援助、関わり（共感、継続的な信頼関係の構築）

③のねらいに対して③の内容～自己肯定感を育むための保育士等の援助、関わり（信頼関係、主体的活動、自発性、意欲、自信を持つこと、見守りと働きかけ）

④のねらいに対して④の内容～心身の疲れを癒すための保育士等の援助、活動（活動のバランスと調和、適切な食事と休息）

※②について「築かれるよう」ではやや曖昧

を見守り、適切に働きかけるようにする。

- ⑤④ 一人一人の子どもの生活リズム、発達過程、保育時間などに応じて、活動内容のバランスや調和を図りながら、適切な食事や休息がとれるようにする。

(2) 教育に関わるねらい及び内容

ア 健康

健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。

(ア) ねらい

- ① 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。
- ② 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。
- ③ 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。

(イ) 内容

- ① 保育士や友達と触れ合い、安定感を持って生活する。
- ② いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。
- ③ 進んで戸外で遊ぶ。
- ④ 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
- ⑤ 健康な生活のリズムを身に付け、楽しんで食事をする。
- ⑥ 身の回りを清潔にし、衣類の着脱、食事、排泄など生活に必要な活動を自分でする。
- ⑦ 保育所における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整える。
- ⑧ 自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。
- ⑨ 危険な場所や災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。

イ 人間関係

他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。

(ア) ねらい

- ① 保育所生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。
- ② 進んで身近な人と関わり、愛情や信頼感を持つ。
- ③ 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。

(イ) 内容

※「健康」に「食事」を盛り込む

<p>① 保育士に様々な欲求を受け止めてもらい、保育士に親しみを持ち、安心感を持って生活する。</p> <p>②①安心できる保育士との関係の中で、身近な大人や友達に関心を持ち、模倣して遊んだり、<u>親しみを持って自ら関わろうとする。</u></p> <p>③②保育士や友達との安定した関係の中で、共に過ごすことの喜びを味わう。</p> <p>④③自分で考え、自分で行動する。</p> <p>⑤④自分でできることは自分でする。</p> <p>⑥⑤友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。</p> <p>⑦⑥自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。</p> <p>⑧⑦友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。</p> <p>⑨⑧友達と一緒に<u>活動する中で、協力して物事をやり遂げようとする気持ちを持つ。</u></p> <p>⑩⑨良いことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。</p> <p>⑪⑩<u>身近な友達との関わりを深めるとともに、異年齢の友達など、様々な友達と関わり、思いやりや親しみを持つ。</u></p> <p>⑫⑪友達と楽しく生活する中で決まりの大切さに気付き、守ろうとする。</p> <p>⑬⑫共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。</p> <p>⑭⑬高齢者をはじめ地域の人々など自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみを持つ。</p> <p>⑮⑭外国人など、自分とは異なる文化を持った人に親しみを持つ。</p> <p>ウ 環境</p> <p>周囲の様々な環境に好奇心や探究心を持って関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。</p> <p>(ア) ねらい</p> <p>① 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ。</p> <p>② 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。</p> <p>③ 身近な事物を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。</p>	<p>※「人間関係」(イ)「内容」①は養護に関わる内容と重複するので(同じなので)削除</p> <p>※①の中の「親しみを持つ」を②に入れる。</p> <p>※友達と「協力」することの大切さを盛り込む</p> <p>※「身近な」「様々な友達」とする</p>
--	--

- ⑦ いろいろな素材や用具に親しみ、工夫して遊ぶ。
- ⑧ 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。
- ⑨ かいたり、つくったりすることを楽しみ、それを遊びに使ったり、飾ったりする。
- ⑩ 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わう。

2 保育の実施上の配慮事項

保育士等は、一人一人の子どもの発達過程やその連続性を踏まえ、ねらいや内容を柔軟に取り扱うとともに、特に、次の事項に配慮して保育しなければならない。

(1) 保育に関わる全般的な配慮事項

- ア 子どもの心身の発達及び活動の実態などの個人差を踏まえるとともに、一人一人の子どもの気持ちを受け止め、援助すること。
- イ 子どもの健康は、生理的、身体的な育ちとともに、自主性や社会性、豊かな感性の育ちとがあいまってもたらされることに留意すること。
- ウ 子どもが自ら周囲に働きかけ、試行錯誤しつつ自分の力で行う活動を見守りながら、適切に援助すること。
- エ 子どもの入所時の保育に当たっては、できるだけ個別的な対応を行いに対応し、子どもが安定感を得て、次第に主体的に保育所の生活に適応できるなじんでいくようにするとともに、既に入所している子どもに不安や動揺を与えないよう配慮すること。
- オ 子どもの国籍や文化の違いを認め、互いに尊重する心を育てるよう配慮すること。
- カ 子どもの性差や個人差にも留意しつつ、性別などによる固定的な意識を植え付けることがないよう配慮すること。

(2) 乳児保育に関わる配慮事項

- ア 乳児は疾病への抵抗力が弱く、心身の機能の未熟さに伴う疾病の発生が多いことから、一人一人の発育及び発達状態や健康状態についての適切な判断に基づく保健的な対応を行うこと。
- イ 一人一人の子どもの生育歴の違いに留意しつつ、欲求を適切に満たし、特定の保育士が応答的に関わるようにする努めること。
- ウ 乳児保育に関わる職員間の連携や嘱託医との連携を図り、第5章（健康及び安全）に

※2.「素材や用具」－保育の実施上の配慮事項（4）－
クと合わせる。

※文言の整理。「適応」より「なじむ」方が子どもの実態に近い。「主体的になじむ」とはいわない。

※「する」ではなく「努める」とする。

<p>示された事項を踏まえ、適切に対応すること。栄養士及び看護師等が配置されている場合は、その専門性をいかした対応を図ること。</p> <p>エ 保護者との信頼関係を築きながら保育を進めるとともに、保護者からの相談に応じ、保護者への支援に努めていくこと。</p> <p>オ 担当の保育士が変わる場合には、子どものそれまでの経験や発達過程に留意し、職員間で協力して対応すること。</p> <p>(3) 3歳未満児の保育に関わる配慮事項</p> <p>ア 特に感染症にかかりやすい時期であるので、体の状態、機嫌、食欲などの日常の状態の観察を十分に行うとともに、適切な判断に基づく保健的な対応を心がけること。</p> <p>イ 食事、排泄、睡眠、衣類の着脱、身の回りを清潔にすることなど、生活に必要な基本的な習慣については、一人一人の状態に応じ、落ち着いた雰囲気の中で行うようにし、子どもが自分でしようとする気持ちを尊重すること。</p> <p>ウ 探索活動が十分できるように、事故防止に努めながら活動しやすい環境を整え、全身を使う遊びなど様々な遊びを取り入れること。</p> <p>エ 子どもの自我の育ちを見守り、その気持ちを受け止めるとともに、保育士が仲立ちとなって、友達の気持ちや友達との関わり方を丁寧に伝えていくこと。</p> <p>オ 情緒の安定を図りながら、子どもの自発的な活動を促していくこと。</p> <p>カ 担当の保育士が変わる場合には、子どものそれまでの経験や発達過程に留意し、職員間で協力して対応すること。</p> <p>(4) 3歳以上児の保育に関わる配慮事項</p> <p>ア 生活に必要な基本的な習慣や態度を身に付けることの大切さを理解し、適切な行動を選択できるよう配慮すること。</p> <p>イ 子どもの情緒が安定し、自己を十分に発揮して活動することを通して、やり遂げる喜びや自信を持つことができるように配慮すること。</p> <p>ウ 様々な遊びの中で、全身を動かして意欲的に活動することにより、体の諸機能の発達が促されることに留意し、子どもの興味や関心が戸外にも向くようにすること。</p> <p>エ けんかなど葛藤を経験しながら次第に相手の気持ちを理解し、相互に必要な存在であることを実感できるよう配慮すること。</p>	<p>※遊びを限定的にしないで広がりを持たせる</p>
---	-----------------------------

- オ 生活や遊びを通して、決まりがあることの大切さに気付き、自ら判断して行動できるよう配慮すること。
- カ 自然との触れ合いにより、子どもの豊かな感性や認識力、思考力及び表現力が培われることを踏まえ、自然との関わりを深めることができるよう工夫すること。
- キ 自分の気持ちや経験を自分なりの言葉で表現することの大切さに留意し、子どもの話しかけに応じるよう心がけること。また、子どもが仲間と伝え合ったり、話し合うことの楽しさが味わえるようにすること。
- ク 感じたことや思ったこと、想像したことなどを、様々な方法で創意工夫をこらして自由に表現できるよう、保育に必要な材料素材や用具をはじめ、様々な環境の設定に留意すること。
- ケ 保育所の保育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに留意し、乳幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること。

第4章 保育の計画及び評価

保育所は、第1章（総則）に示された保育の目標を達成するために、全体的な「保育計画」及び保育の基本となる「保育課程」を編成するとともに、これを具体化した「指導計画」から構成される保育の計画を作成しなければならない。

保育の計画保育課程及び指導計画（以下、「保育の計画」という。）は、すべての子どもが、入所している間、安定した生活を送り、充実した活動ができるように、柔軟で発展的なものとし、また、一貫性のあるものとなるよう配慮することが重要である。

また、保育所は、保育の計画に基づいて保育し、保育の内容の評価及びこれに基づく改善に努め、保育の質の向上を図るとともに、その社会的責任を果たさなければならない。

1 保育の計画

(1) 保育計画課程

ア 保育計画課程は、各保育所の保育の方針や目標に基づき、第2章（子どもの発達）に示された子どもの発達過程を踏まえ、前章（保育の内容）に示されたねらい及び内容が、保育所生活の全体を通して、総合的に展開されるよう、編成達成されるよう、作成さ

※言葉を添える

※「材料」だけでなく「素材や用具」とする

※3歳以上児の項目なので「幼児期」とする

※「保育計画」を「保育課程」に変更したことに伴う修正

※保育課程の編成における留意事項や配慮についての説明を補う。

れなければならない。

イ 保育計画課程は、地域の実態、子どもや家庭の状況、保護者の意向、保育時間などを考慮し、子どもの育ちに関する長期的見通しを持って適切に編成で作成されなければならない。また、子どもの育ちに関する長期的見通しを持って保育するよう配慮することが重要である。

ウ 保育課程は、子どもの生活の連続性や発達の連続性に留意し、各保育所が創意工夫して保育できるよう、編成されなければならない。

(2) 指導計画

ア 指導計画の作成

指導計画の作成に当たっては、次の事項に留意しなければならない。

(ア) 保育計画課程に基づき、子どもの生活や発達を見通した長期的な指導計画と、それに関連しながら、より具体的な子どもの日々の生活に即した短期的な指導計画を作成して、保育が適切に展開されるようにすること。

(イ) 子ども一人一人の発達過程や状況を十分に踏まえて保育すること。

(ウ) 保育所の生活における子どもの発達過程を見通し、生活の連続性、季節の変化などを考慮し、子どもの実態に即した具体的なねらい及び内容を設定すること。

(エ) 具体的なねらいが達成されるよう、子どもの生活する姿や発想を大切に適切な環境を構成し、子どもが主体的に活動できるようにすること。

イ 指導計画の展開

指導計画に基づく保育の実施に当たっては、次の事項に留意しなければならない。

(ア) 施設長、保育士などすべての職員による適切な役割分担と協力体制を整えること。

(イ) 子どもが行う具体的な活動は、生活の中で様々に変化することに留意して、子どもが望ましい方向に向かって自ら活動を展開できるよう必要な援助を行うこと。

(ウ) 子どもの主体的な活動を促すためには、保育士等が多様な関わりを持つことが重要であることを踏まえ、子どもの情緒の安定や発達に必要な豊かな体験が得られるよう援助すること。

(エ) 保育士等がは、一人一人の子どもの姿や環境への関わり、保育の過程などを把握し、保育の過程を子どもの実態や子どもを取り巻く状況の変化などに即して保育の過程

※「保護者の意向」については第1章総則に、すべてに及ぶ基本原則として示すこととする。また、「子どもや家庭の状況」に保護者の意向を含んで考えていく。

※指導計画作成の留意点であるので語尾が「保育すること」では不適當。

※わかりやすく語順を変える。

を記録するとともに、これらを踏まえ、指導計画に基づく保育の内容の見直しを行い、
や改善を図ること。

(3) 指導計画の作成上、特に留意すべき事項

指導計画の作成に当たっては、第2章（子どもの発達）、前章（保育の内容）及びその
他の関連する章に示された事項を踏まえ、特に次の事項に留意しなければならない。

ア 発達過程に応じた保育

(ア) 3歳未満児については、一人一人の子どもの生育歴、心身の発達、活動の実態等に
即して、個別的な計画を作成すること。

(イ) 3歳以上児については、個の成長と、子ども相互の関係や協同的な活動が促される
よう配慮して作成すること。

(ウ) 異年齢で構成される組やグループで保育を行う場合での保育においては、一人一人
の子どもの生活や経験、発達過程などを把握し、適切な援助や環境構成ができるよう
配慮すること。

イ 長時間にわたる保育

長時間にわたる保育については、子どもの発達過程、生活のリズム及び心身の状態
に十分配慮して、保育の内容や方法、職員の協力体制、家庭との連携などを指導計画
に位置付けること。

ウ 障害のある子どもの保育

(ア) 障害のある子どもの保育については、一人一人の子どもの発達過程や障害の状態を
把握し、適切な環境の下で、障害のある子どもが他の子どもとの生活を通して共に成
長できるよう、指導計画の中に位置付けること。また、子どもの状況に応じた保育を
実施する観点から、個別の支援計画を作成するなど適切な対応を図ること。

(イ) 保育の展開に当たっては、その子どもの発達の状況や日々の状態によっては、指導
計画にとらわれず、柔軟に保育したり、職員の連携体制の中で個別の関わりが十分行
えるようにすること。

(ウ) 家庭との連携を密にし、保護者の意向を受け止めて、保護者との相互理解を図り
ながら、適切に対応すること。

(エ) 専門機関との連携を図り、必要に応じて助言等を得ること。

※ここにおいては保育士の保育の記録、「見直し」が重要
であり、これが2の「自己評価」につながる。

※指導計画の作成上の留意点として語尾をそろえる。

※「異年齢保育等を行う場合」では、特別な印象を受ける
ので適切な表現に。

（個別の「支援計画」のままにするが、個別の指導計画と
支援計画があることや、その両方の内容を併せたものを作
成することなど、解説書で説明する必要あり）

※「保護者の意向」一方的な意向ではなく、相互理解を図
っていくことが重要。

<p>エ 小学校との連携</p> <p>（ア）子どもの生活や発達の連続性を踏まえ、保育の内容の工夫を図るとともに、就学に向けて、保育所の子どもと小学校の児童との交流、職員同士の交流、情報共有や相互理解など小学校との積極的な連携を図るよう配慮すること。</p> <p>（イ）子どもに関する情報共有に関して、保育所に入所している子どもの就学に際し、市町村の支援の下に、子どもの育ちを支えるための資料が保育所から小学校へ送付されるようにすること。</p> <p>オ 家庭及び地域社会との連携</p> <p>子どもの生活の連続性を踏まえ、家庭及び地域社会と連携して保育が展開されるよう配慮すること。その際、家庭や地域の機関及び団体の協力を得て、地域の自然、人材、行事、施設等の資源を積極的に活用し、豊かな生活体験をはじめ保育内容の充実を図られるよう配慮すること。</p> <p>2 保育の内容等の自己評価</p> <p>（1）保育士等の自己評価</p> <p>ア 保育士等は、保育の計画や保育の記録を通して、自らの保育実践を振り返り、自己評価することを通して、その専門性の向上や保育実践の改善に努めなければならない。</p> <p>イ 保育士等による自己評価に当たっては、次の事項に留意しなければならない。</p> <p>（ア）子どもの活動内容やその結果だけでなく、子どもの心の育ちや意欲、取り組む過程への関わりなどに十分配慮すること。</p> <p>（イ）自らの保育実践の振り返りや職員相互の話し合い等を通じて、専門性の向上及び保育の質の向上のための課題を明確にするとともに、保育所全体の保育の内容に関する認識を深めること。</p> <p>（2）保育所の自己評価</p> <p>ア 保育所は、保育の質の向上を図るため、保育課程及び指導計画の展開や保育士等の自己評価を踏まえ、当該保育所の保育の内容等について、自ら評価を行い、その結果を公表するよう努めなければならない。</p> <p>イ 保育所の自己評価を行うに当たっては、次の事項に留意しなければならない。</p>	<p>※わかりやすく修正</p>
--	------------------

（ア）地域の实情や保育所の実態に即して、適切に評価の観点や項目等を設定し、全職員による共通理解をもって取り組むとともに、評価の結果を踏まえ、当該保育所の保育の内容等の改善を図ること。

（イ）児童福祉施設最低基準第36条の趣旨を踏まえ、保育の内容等の評価に関し、保護者及び地域住民等の意見を聞くことが望ましいこと。

第5章 健康及び安全

子どもの健康及び安全は、子どもの生命の保持と健やかな生活の基本であり、保育所においては、一人一人の子どもの健康の保持及び増進並びに安全の確保とともに、保育所の子ども集団全体の健康及び安全の確保に努めなければならない。また、子どもが、自らの体や健康に関心を持ち、心身の機能を高めていくことが大切である。このため、保育所は、第1章（総則）、第3章（保育の内容）等の関連する事項に留意し、次に示す事項を踏まえ、保育しなければならない。

1 子どもの健康支援

（1）子どもの健康状態並びに発育及び発達状態の把握

ア 子どもの心身の状態に応じて保育するために、子どもの健康状態並びに発育及び発達状態について、定期的、継続的に、また、必要に応じて随時、把握すること。

イ 保護者からの情報とともに、登所時及び保育中を通じて子どもの状態を観察し、何らかの疾病が疑われる状態や傷害が認められた場合には、保護者に連絡するとともに、嘱託医と相談するなど適切な対応を図ること。

ウ 子どもの心身の状態等を観察し、不適切な養育の兆候が見られる場合には、市町村や関係機関と連携し、要保護児童対策地域協議会で検討するなど適切な対応を図ること。また、虐待が疑われる場合には、速やかに市町村又は児童相談所に通告し、適切な対応を図ること。

（2）健康増進

ア 子どもの健康に関する保健計画を作成し、全職員がそのねらいや内容を明確にしなが、一人一人の子どもの健康の保持及び増進に努めていくこと。

イ 子どもの心身の健康状態や疾病等の把握のために、嘱託医等により定期的に健康診断を行い、その結果を記録し、保育に活用するとともに、保護者に連絡し、保護者が子ど

<p>もの状態を理解し、日常生活に活用できるようにすること。</p> <p>(3) 疾病等への対応</p> <p>ア 保育中に体調不良や傷害が発生した場合には、その子どもの状態等に応じて、<u>保護者に連絡するとともに</u>、適宜、嘱託医や子どものかかりつけ医等と相談し、保護者に連絡するとともに、適切な処置を行うこと。看護師等が配置されている場合には、その専門性をいかした対応を図ること。</p> <p>イ 感染症やその他の疾病の発生予防に努め、その発生や疑いがある場合には、必要に応じて嘱託医、市町村、保健所等に連絡し、その指示に従うとともに、保護者や全職員に連絡し、協力を求めること。また、感染症に関する保育所の対応方法等について、あらかじめ関係機関の協力を得ておくこと。看護師等が配置されている場合には、その専門性をいかした対応を図ること。</p> <p>ウ 子どもの疾病や不時等の事態に備え、医務室等の環境を整え、救急用の薬品、材料等を常備し、適切な管理の下に全職員が対応できるようにしておくこと。</p> <p>2 環境及び衛生管理並びに安全管理</p> <p>(1) 環境及び衛生管理</p> <p>ア 施設の温度、湿度、換気、採光、音などの環境を常に適切な状態に保持するとともに、施設内外の設備及び用具等の衛生管理に努めること。</p> <p>イ 子ども及び職員が、手洗い等により清潔を保つようにするとともに、施設内外の保健的環境の維持及び向上に努めること。</p> <p>(2) 事故防止及び安全対策</p> <p>ア 保育中の事故防止のために、子どもの心身の状態等を踏まえつつ、保育所内外の安全点検に努め、安全対策のために職員の共通理解や体制づくりを図るとともに、家庭や地域の諸機関の協力の下に安全指導を行うこと。</p> <p>イ 災害や事故の発生に備え、危険箇所の点検や避難訓練を実施するとともに、外部からの不審者等の侵入防止のための措置や訓練など不測の事態に備えて必要な対応を図ること。また、子どもの精神保健面における対応に留意すること。</p> <p>3 食育の推進</p> <p>保育所における食育は、健康な生活の基本としての「食を営む力」の育成に向け、その基</p>	<p>※保護者に連絡することがほとんどの場合、先である実情を踏まえて、語順を変える。</p> <p>※「不時の事態」はわかりにくい。</p>
--	--

保育所保育指針（案）

礎を培うことを目標として、次の事項に留意して実施しなければならない。

- (1) 子どもが生活と遊びの中で、意欲を持って食に関わる体験を積み重ね、食べることを楽しみ、食事を楽しみ合う子どもに成長していくことを期待するものであること。
- (2) 乳幼児期にふさわしい食生活が展開され、適切な援助が行われるよう、食事の提供を含む食育の計画を作成し、保育計画課程及び指導計画保育の計画に位置付けるとともに、その評価及び改善に努めること。
- (3) 子どもが自らの感覚や体験を通して、自然の恵みとしての食材や調理する人への感謝の気持ちが育つように、子どもと調理員との関わりや、調理室など食に関わる保育環境に配慮すること。
- (4) 体調不良、食物アレルギー、障害のある子どもなど、一人一人の子どもの心身の状態等に応じ、嘱託医、かかりつけ医等の指示や協力の下に適切に対応すること。栄養士が配置されている場合は、専門性をいかした対応を図ること。

4 健康及び安全の実施体制等

施設長は、入所する子どもの健康及び安全に最終的な責任を有することにかんがみ、この章の1から3に規定する事項が保育所において適切に実施されるように、次の事項に留意し、保育所における健康及び安全の実施体制等の整備に努めなければならない。

- (1) 全職員が健康及び安全に関する共通理解を深め、適切な分担と協力の下に年間を通じて計画的に取り組むこと。
- (2) 取組の方針や具体的な活動の企画立案及び保育所内外の連絡調整の業務について、専門的職員が担当することが望ましいこと。栄養士、看護師等が配置されている場合には、その専門性をいかして業務に当たること。
- (3) 保護者と常に密接な連携を図るとともに、保育所全体の方針や取組について周知にするよう努めること。
- (4) 市町村の支援の下に、地域の関係機関等との日常的な連携を図り、必要な協力が得られるよう努めること。

※第4章参照

健康及び安全に関わる事項は、専門的な知識、経験、保護者の理解と協力等を要することにかんがみ、その効果的な実施のため、次の事項に留意しなければならない。

- (1) 施設長の責任の下に、年間を通じて計画的に展開するために、全職員が連携、協力して行うこと。

↑

中間報告

※施設長の役割と責任の重要性をより明確にした。また、施設長の責務の下、計画的、組織的に取り組むことの重要性を打ち出した。

※(3)「周知に努める」より「周知するよう努める」の方が適当

第6章 保護者に対する支援

保育所における保護者への支援は、保育士等の業務であり、その専門性をいかした子育て支援の役割は、特に重要なものである。保育所は、第1章（総則）に示されているように、その特性をいかし、保育所に入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭への支援について、職員間の連携を図りながら、次の事項に留意して、積極的に取り組むことが求められる。

1 保育所における保護者に対する支援の基本

- (1) 子どもの最善の利益を考慮し、子どもの福祉を重視すること。
- (2) 保護者とともに、子どもの成長の喜びを共有すること。
- (3) 保育に関する知識や技術などの保育士の専門性や、子どもの集団が常に存在すること等の保育環境など、保育所の特性をいかすこと。
- (4) 一人一人の保護者の状況を踏まえ、子どもと保護者の安定した関係に配慮して、保護者の養育力の向上に資するよう、適切に支援すること。
- (5) 子育て等に関する相談や助言に当たっては、保護者の意向~~気持ち~~を受け止め、相互の信頼関係を基本に、保護者一人一人の自己決定を尊重すること。
- (6) 子どもの利益に反しない限りにおいて、保護者や子どものプライバシーの保護、知り得た事柄の秘密保持に留意すること。
- ~~(6)~~ (7) 地域の子育て支援に関する資源を積極的に活用するとともに、子育て支援に関する地域の関係機関、団体等との連携及び協力を図ること。

2 保育所に入所している子どもの保護者に対する支援

- (1) 保育所に入所している子どもの保護者に対する支援は、子どもの保育との密接な関連の中で、子どもの送迎時の対応、相談や助言、連絡や通信、会合や行事など様々な機会を活用して行うこと。
- (2) 保護者に対し、保育所における子どもの様子や日々の保育の意図などを説明し、保護者との相互理解を図るよう努めること。
- (3) 保育所において、保護者の仕事と子育ての両立等を支援するため、通常の保育に加えて、保育時間の延長、休日、夜間の保育、病児・病後児に対する保育など多様な保育を実施する場合には、保護者の状況に配慮するとともに、子どもの福祉が尊重されるよう努めるこ

※「保護者の意向」を「気持ち」する。気持ちや思いを受容することの大事さについての説明である。

※守秘義務等についての規定を設ける

職員の資質向上に関しては、次の事項に留意して取り組むよう努めなければならない。

(1) 子どもの最善の利益を考慮し、人権に配慮した保育を行うためには、職員一人一人の倫理観、人間性並びに保育所職員としての職務及び責任の理解と自覚が基盤となること。

(2) 保育所全体の保育の質の向上を図るため、職員一人一人が、保育実践や研修などを通じて保育の専門的知識及び技術専門性などを高めていくとともに、保育実践や保育内容に関する職員の共通理解を図り、協働性を高めていくことが、保育所全体の保育の質の向上につながること。

(3) 職員同士の信頼関係とともに、職員と子ども及び職員と保護者との信頼関係を基盤として形成していく中で、常に、自己研鑽に努め、喜びや意欲を持って保育に当たること。

2 施設長の責務

施設長は、保育の質及び職員の資質の向上のため、次の事項に留意するとともに、職員の資質向上のために必要な環境の確保に努めなければならない。

(1) 施設長は、保育所の役割や社会的責任を遂行するために、法令等を遵守し、保育所を取り巻く社会情勢などを踏まえ、その専門性等の向上に努めること。

(2) 第4章（保育の計画及び評価）の2の(1)（保育士等の自己評価）及び(2)（保育所の自己評価）等を踏まえ、職員が保育所の課題について共通理解を深め、協力して改善に努めることができる体制をつくること。

(3) 職員及び保育所の課題を踏まえた保育所内外の研修を体系的、計画的に実施するとともに、職員の自己研鑽に対する援助や助言に努めること。

3 職員の研修等

(1) 職員は、子どもの保育及び保護者に対する保育に関する指導が適切に行われるように、自己評価に基づく課題等を踏まえ、保育所内外の研修等を通じて、必要な知識及び技術の修得、維持並びに向上に努めなければならない。

(2) 職員一人一人が課題を持って主体的に学ぶとともに、他の職員や地域の関係機関など、様々な人や場との関わりの中で共に学び合う環境を醸成していくことにより、保育所の活性化を図っていくことが求められる。

※目的を明記

※「形成していく中で」の方が実態に即している

※わかりやすくするため、語順を変える。

保育所保育指針 中間報告後の修正、その主なポイント

○ 第1章総則 「4. 保育所の社会的責任」

保育所の特性や責任についてより厚みを持たせ、日常的な対応や実践の中で取り組むことの重要性を強調した。

- (1) 「保育所は、子どもの人権に十分配慮するとともに、子ども一人一人の人格を尊重して、保育を行わなければならない。」
- (2) 「保育所は、地域社会との交流や連携を図り、保護者や地域社会に、当該保育所が行う保育の内容を適切に説明するよう努めなければならない」

○ 第3章 保育の内容1—「(1) 養護に関わるねらい及び内容」

養護に関わる「ねらい」と「内容」について、概念の違いによる書き分け、重複を避けるなどの調整を行った。特にねらいについては簡潔に示すとともに、「教育に関わるねらい及び内容」、「保育の実施上の配慮事項」、第5章「健康と安全」との整合性を図った。

○ 第4章 保育の計画及び評価 「1. 保育の計画」他

保育所における全体的な「保育計画」を「保育課程」と改め、保育の基本としての重要性や、保育課程に基づく計画的かつ組織的な保育実践や自己評価を位置づけた。

「保育所は、第1章（総則）に示された保育の目標を達成するために、保育の基本となる「保育課程」を編成するとともに、これを具体化した「指導計画」を作成しなければならない。

（以下略）」（第4章前文）

○ 第5章 健康及び安全「4. 健康及び安全の実施体制」

保育所における子どもの健康と安全の重要性と、そのための保育所の責任をより明確にした。特に施設長の責任の下、保育所全体で計画的、組織的に取り組むことの重要性を打ち出した。

「施設長は、入所する子どもの健康及び安全に最終的な責任を有することにかんがみ、この章の1から3に規定する事項が保育所において適切に実施されるように、次の事項に留意し、保育所における健康及び安全の実施体制等の整備に努めなければならない。

- (1) 全職員が健康及び安全に関する共通理解を深め、適切な分担と協力の下に年間を通じて計画的に取り組むこと。

○ 第6章 保護者に対する支援 「1. 保育所における保護者に対する支援の基本」

保護者支援の基本に保育所の秘密保持について明記した。

- (6) 子どもの利益に反しない限りにおいて、保護者や子どものプライバシーの保護、知り得た事項の秘密保持に留意すること」

- その他、第2章「子どもの発達」についての記述をはじめ、各章で保育所や子どもの実態により即したものとなるよう、文言や語順の精査等を行い、細かい修正を行った。

中間報告（H19.8.3）以降の審議経過と今後の改定スケジュールについて

1 中間報告（H19.8.3）以降の審議経過

- 平成 19 年 8 月 9 日
 - ・ 第 1 回ワーキンググループ全体会開催
（以降、各ワーキンググループに分かれて作業を進める。）
- 平成 19 年 10 月 30 日
 - ・ 検討会（臨時会）開催
- 平成 19 年 11 月 30 日
 - ・ 第 2 回ワーキンググループ全体会開催
- 平成 19 年 12 月 21 日
 - ・ 第 15 回検討会
報告書を提出

2 今後の改定スケジュールについて

- 平成 20 年 2 月上旬
 - ・ 告示案についてパブリックコメント
- 平成 20 年 3 月上旬
 - ・ パブリックコメントにより寄せられた意見の公表
 - ・ 第 16 回検討会開催（解説書の公表）
- 平成 20 年 3 月末
 - ・ 保育所保育指針の公布
- 平成 20 年度
 - ・ 保育所保育指針の周知
- 平成 21 年 4 月 1 日
 - ・ 保育所保育指針の施行

保育所保育指針解説書の構成（案）

章 立て ・ 項 目 立 て	主な内容	P
序 章 （導入）		6
1. 改定の経緯	○保育所保育指針について、また解説書について明記するとともに、指針改定の背景や理由、基本的考え方を明らかにする。また、改定の要点を挙げ、保育の内容の充実と保育の質の向上を図るための指針改定であることを示す。	
（1）保育所保育指針とは何か		
（2）改定の背景		
2. 改定にあたっての基本的考え方		
（告示化の意義と指針の性格／内容の大綱化・性格の明確化／規範性を有することと保育所の創意工夫／内容や文言の明解性について）		
3. 改定の要点		
（1）保育所の役割の明確化		
（2）保育の内容の改善		
（発達過程等の把握による子どもの理解／養護と教育の一体的な実施という保育所保育の特性の明確化／健康・安全のための体制充実／小学校との連携		
（3）保護者支援		
（4）保育の質を高める仕組み		
第 1 章 総 則 （保育指針の基本となる考え方と全体像の明示）		17
1. 趣旨 （保育指針が規定する事項と目指すもの）	○保育指針の根幹を成す保育理念や保育所の役割・機能について、告示文に沿って明らかにする。特に保育所保育の特性や社会的責任について、保育所の今日的役割や社会から求められている事柄を踏まえ、明記する。 ○第 1 章に基づき第 2 章以下が展開され、整合性、連続性が図られていることを明記する。	
2. 保育所の役割		
（1）保育所の目的と子どもの最善の利益の考慮		
（2）保育所保育の特性		
（家庭との緊密な連携／専門的職員が環境を通して養護と教育を一体的に行う）		
（3）子育て支援（保護者への支援と地域子育て支援）		
（4）保育士の専門性		
3. 保育の原理		
（1）保育所の目標		
（保育の目標と保護者支援の目標／養護と 5 領域の保育目標／保育指導）		
（2）保育の方法		
（遊びを通して総合的に保育する／子ども相互の関わりや協同的学び）		
（3）保育の環境		
（保育環境の整備・環境の構成・関わり合う力を育む環境）		
4. 保育所の社会的責任		
（1）子どもの人格と人権の尊重		
（2）保育所の説明責任		
（3）個人情報保護と苦情解決		

<p>第2章 子どもの発達（発達の道筋、発達の特性や連続性についての明示と説明）</p>		22
<p>1. 乳幼児期の発達の特性 （人への信頼感と自我の芽生え／環境に主体的に関わる／子ども相互の関わりと社会性の発達／発達の個人差／集団の育ちと個の成長／生きる力の基礎を培う）</p> <p>2. 発達過程</p> <p>（1）Ⅰ・おおむね6か月未満 （著しい発達／特定の大人との情緒的な絆）</p> <p>（2）Ⅱ・おおむね6か月から1歳3か月 （「座る」から「歩く」へ／探索活動／愛着と人見知り／言葉の発見／離乳）</p> <p>（3）Ⅲ・おおむね1歳3か月から2歳 （行動範囲の拡大／象徴機能と言葉の獲得／友達や周囲の人への興味・関心）</p> <p>（4）Ⅳ・おおむね2歳 （基本的な運動機能／言葉を使うことの喜び／自己主張）</p> <p>（5）Ⅴ・おおむね3歳 （基本的生活習慣の形成／言葉の発達／友達との関わり／ごっこ遊びと社会性の発達）</p> <p>（6）Ⅵ・おおむね4歳 （全身のバランス／身近な環境への関わり／想像力の広がり／葛藤の経験／決まりの大切さへの気づき）</p> <p>（7）Ⅶ・おおむね5歳 （基本的生活習慣の確立／運動能力が高まる／目的のある集団行動／判断力・批判力の芽生え／仲間の中の一人としての自覚）</p> <p>（8）Ⅷ・おおむね6歳 （巧みな全身運動／自主と協調の態度／思考力と自立心の高まり）</p>	<p>○子どもの発達についての基本的考え方や、その特性、発達の道筋を告示文に沿って示し、子どもを保育していく上での大前提とする。子どもの発達の連続性や、関係性のなかで人が育つことなどについて、明らかにする。</p> <p>○発達過程の8区分の考え方は現行どおり。</p>	
<p>第3章 保育の内容（保育のねらいと内容についての趣旨と説明）[64]</p>		65
<p>1. 保育のねらい及び内容</p> <p>（1）ねらい及び内容の基本的考え方 （「ねらい」「内容」の定義・意味内容／「養護」「教育」の定義・意味内容）</p> <p>（2）養護に関わるねらい及び内容（養護の重要性とその意義）</p> <p>ア 生命の保持（①快適な生活②健康と安全③生理的欲求の充足④健康増進）</p> <p>イ 情緒の安定（①安定感②自己発揮③自己肯定感④心身の癒し）</p> <p>（3）教育に関わるねらい及び内容（教育の重要性とその意義）</p> <p>ア 健康（①～⑨の「内容」についての説明）</p> <p>イ 人間関係（①～⑭の「内容」についての説明）</p> <p>ウ 環境（①～⑫の「内容」についての説明）</p> <p>エ 言葉（①～⑫の「内容」についての説明）</p> <p>オ 表現（①～⑩の「内容」についての説明）</p>	<p>○保育のねらいと内容、養護に関わる事項と教育に関わる事項について、その関連性なども踏まえながら、保育士が保育を把握し評価する視点として整理して明記する。</p> <p>○告示文に沿って一つ一つの内容を説明していく。</p>	

<p>2. 保育の実施上の配慮事項（各々の発達過程と保育士の姿勢と関わりの視点）</p> <p>(1) 保育に関わる全般的な配慮事項（ア～カについての説明）</p> <p>(2) 乳児保育に関わる配慮事項（ア～オについての説明）</p> <p>(3) 3歳未満児に関わる配慮事項（ア～カについての説明）</p> <p>(4) 3歳以上児に関わる配慮事項（ア～ケについての説明）</p>	<p>○配慮事項については4項目に分けて示す。</p>	
<p>第4章 保育の計画と評価</p> <p>（計画性のある保育と保育の計画・評価についての説明とその重要性を明示）</p>		35
<p>1. 保育の計画</p> <p>(1) 保育課程とは</p> <p>(2) 保育課程の編成</p> <p>(3) 保育課程編成の留意事項</p>	<p>○保育計画という名称が保育課程と改められたことについて説明するとともに、保育課程の意義やそれに基づく指導計画の作成とその展開について明らかにする。また、特に留意すべき事項の中に示されている障害のある子どもの保育や小学校との連携について明記する。</p> <p>○保育所が計画に基づく保育の振り返りや自己評価を通して、保育の改善や専門性の向上を図っていくことの重要性について説明する。</p>	
<p>2. 指導計画の作成</p> <p>(1) 保育課程に基づく指導計画の作成 （保育課程と指導計画／長期的指導計画と短期的指導計画／指導計画作成の基本）</p> <p>(2) 指導計画の展開 （保育の過程とは／保育の振り返り／保育の省察の様々な方法）</p>		
<p>3. 特に留意すべき事項</p> <p>(1) 発達過程に応じた保育 （3歳未満児の指導計画／3歳以上児の指導計画／異年齢保育の指導計画）</p> <p>(2) 長時間にわたる保育 （長時間にわたる保育の実際／家庭との連携／職員の協力体制）</p> <p>(3) 障害のある子どもの保育 （障害のある子どもの理解と保育の展開／個別の支援計画とクラス等の指導計画との関連／職員間の連携／家庭との連携／地域や専門機関との連携）</p> <p>(4) 小学校との連携 （小学校との連携において前提とすべきこと／連携のあり方／情報の共有に関する基本的な考え方と内容／個人情報の取り扱いについて／放課後児童クラブとの交流）</p> <p>(5) 家庭及び地域社会との連携 （連携の必要性とその背景／保護者とのパートナーシップ／地域社会との連携）</p>		
<p>4. 保育内容の自己評価等（計画→実践→評価～計画と評価の連動と質の向上）</p> <p>(1) 自己評価の意義について</p> <p>(2) 保育士等の自己評価の視点</p> <p>(3) 保育者の学び合いとしての自己評価</p> <p>(4) 保育所の自己評価の観点</p> <p>(5) 自己評価の公表</p>		

<p>第5章 健康及び安全（保育所における健康と安全の意義と内容・方法・体制等）</p>		28
<p>1. 子どもの健康支援</p> <p>(1) 子どもの健康状態並びに発育及び発達状態の把握</p> <p>①子どもの健康状態並びに発育及び発達状態の把握の意義 (把握の意義／把握の方法／把握の実際／健康観察)</p> <p>②発育・発達状態の把握 (把握結果の対応／虐待等の早期発見と対策)</p> <p>(2) 健康増進</p> <p>(3) 疾病等への対応 (医務室等の整備／体調不良等や病初期の早期把握と適切な対応／感染症の集団発生予防／与薬の留意点／個別的な配慮を必要とする子どもへの対応／救急蘇生法等についての研鑽／病児・病後児保育事業を実施する場合の配慮)</p>	<p>○保育の基本となる子どもの健康と安全について、その重要性を明らかにするとともに、具体的な対応や援助について示していく。</p> <p>保育士、看護師や栄養士等、職員の連携や役割分担、嘱託医や関係機関との連携等、子どもの健康と安全を守る体制や決め細やかな対応について、詳しく明記する。</p> <p>○食育の推進について、保育課程に位置づけ計画的に保育所全体で取り組んでいくことや、その内容、方法について明記する。</p>	
<p>2. 環境及び衛生管理並びに安全管理</p> <p>(1) 環境及び衛生管理 (感染症発症の予防対策／食中毒発生時の対応／子どもたちへ衛生指導／職員の衛生知識の向上と手順の周知徹底)</p> <p>(2) 事故防止及び安全対策 (日常の安全点検／災害発生時の対応／避難訓練／事故防止マニュアルの整備と事故防止／危機管理)</p>		
<p>3. 食育の推進</p> <p>(1) 食育の計画</p> <p>(2) 食育のための環境</p> <p>(3) 特別の配慮を含めた一人ひとりの子どもへの環境 (体調のよくない子ども／食物アレルギー／障害のある子ども／栄養士の専門的役割)</p> <p>(4) 食を通じた保護者への支援</p>		
<p>4. 健康及び安全の実施体制等</p> <p>(1) 健康と安全に関する活動</p> <p>(2) 専門職の連携の重要性</p> <p>(3) 家庭との連携</p> <p>(4) 専門機関・地域との連携</p>		
<p>第6章 保護者に対する支援（保育所の保護者支援の意義と具体的内容及びその方法）</p>		22
<p>保護者支援に関する原則／保育所における二つの子育て支援／子育て支援の機能と特性</p> <p>1. 保育所における保護者に対する支援の基本</p> <p>(1) 子どもの最善の利益と支援の原則</p>	<p>○保護者支援の原則や基本を踏まえることを明記する。</p>	

<ul style="list-style-type: none"> (2) 保護者との共感 (3) 保育所の特性をいかした支援 (4) 保護者の養育力向上への寄与 (5) 相談・助言におけるソーシャルワークの機能 (6) プライバシーの保護及び秘密保持 (7) 地域関係機関との連携・協力 		
<p>2. 保育所に入所する子どもの保護者に対する支援</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 子どもの保育と密接に関連した保護者支援 (2) 保護者との相互理解 (3) 保護者の仕事と子育ての両立等への支援 (4) 保護者に対する個別支援 		
<p>3. 地域における子育て支援</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 地域における子育て支援の役割 (2) 地域子育て支援の二つの支援 (3) 子育て支援の活動場面 (4) 安心して利用できる環境づくり (5) 一時保育 (6) 地域関係機関との連携及び人材等の積極的利用 (7) 地域の子育て力向上への寄与 (8) 地域における関係づくり及び問題発生予防と早期対応 	<p>○保育所の2つに子育て支援について整理して明示する。また、保育所の特性を生かした支援について明らかにするとともに、保育士の専門性と保護者支援の役割と支援の方法や体制などについてに説明する。</p>	
<p>第7章 職員の資質向上（保育の質の向上に係る施設長の責務や職員の研修について）</p>		<p>20</p>
<p>1. 資質向上に関する基本</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 保育所職員として求められる専門性と人間性 (2) 職員の共通理解と協働性 (3) 喜びと意欲をもって取り組むために 		
<p>2. 施設長の責務</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 職員の資質向上のための環境の確保 (2) 施設長の職務とその専門性の向上 (3) 研修の体系的・計画的実施 (4) 自己研鑽への援助と助言 		
<p>3. 職員の研修等</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 専門性を高める研修 (2) 主体的な学び、学び合いの環境づくり、保育所の活性化 	<p>○保育の質の向上、専門性の向上を図り、社会的責任を果たしていくために特に施設長の役割や研修が重要であることを明らかにし、学び合いの環境づくりや保育所の活性化につなげていくことを明記する。</p>	

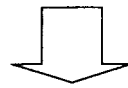
保育所保育指針の改定について

資料7

「保育所保育指針改定に関する検討会」報告書(平成19年12月21日)

改定の背景

- 子どもの生活環境の変化(人と関わる経験の不足、生活リズムの乱れなど)
- 保護者の子育て環境の変化(不安や悩みを抱える保護者の増加、養育力の低下など)



保育所に期待される
役割が深化・拡大

- ・質の高い養護や教育の機能
- ・子どもの保育とともに、保護者に対する支援を担う役割

保育所が果たすべき役割を再確認し、その役割・機能が適切に発揮できるよう、保育の内容の質を高める観点から、指針の内容の改善・充実を図ることが必要。

改定に当たっての基本的考え方

- 質の向上の観点から、大臣告示化により最低基準としての性格を明確化
- 保育所の創意工夫や取組を促す観点から、内容の大綱化(現行の13章を7章に)
- 保育現場で活用され、保護者にも理解されるよう、明解で分かりやすい表現に
- 指針と併せ、解説を作成

改定の内容

○ 保育所の役割

- ・ 保育所の役割(目的・理念、子どもの保育と保護者への支援など)、保育士の業務、保育所の社会的責任の明確化

○ 保育の内容、養護と教育の充実

- ・ 養護と教育が一体的に展開される保育所保育の特性とその意味内容の明確化
- ・ 養護と教育の視点を踏まえた保育のねらいと内容の設定
- ・ 保育の内容の大綱化、改善・充実
- ・ 誕生から就学までの長期的視野を踏まえた子どもの発達の道筋
- ・ 健康・安全及び食育の重要性、全職員の連携・協力による計画的な実施

○ 小学校との連携

- ・ 保育の内容の工夫、小学校との積極的な連携、子どもの育ちを支えるための資料の送付・活用

○ 保護者に対する支援

- ・ 保育所の特性や保育士の専門性を生かした保護者支援
- ・ 子どもの最善の利益の考慮、保護者とともに子育てに関わる視点、保護者の養育力の向上等に結び付く支援の重要性

○ 計画・評価、職員の資質向上

- ・ 保育実践の組織性・計画性を高めるための「保育課程」の編成
- ・ 自己評価の重要性、評価結果の公表
- ・ 研修や職員の自己研鑽等を通じた職員の資質向上、職員全体の専門性の向上
- ・ 施設長の責務の明確化

改定に伴う今後の検討課題

- 指針の趣旨・内容の保育現場等への伝達・普及
- 保育内容の充実に資するための制度改正(児童福祉施設最低基準の見直し)
 - ※ 養護及び教育を一体的に行うという保育所保育の特性を明記。
- 保育所における人材の確保と定着
- 保育環境等の整備
- 保育の質の向上のためのプログラムの策定